フォルクローロ

きくらげ

第一章「銀河鉄道、地勢、座敷ワラシ」

　むかし、あったずもな。
　そんな意味不明センテンスで始まる昔話の集まる町が岩手県中部にある。
　偉大なる柳田国男が古くからこの地に伝わる民間伝承を採集して回り、その土地の風俗や慣習とともにまとめた「遠野物語」は日本人なら必読の書である。
　いや、俺はそんな説教がましいことを言うつもりは全くないし、そもそも民俗学者でも何でもない単なる探偵なわけだが、この本だけはいたく気に入ってかつてから遠野には行きたいと心から願っていた。
　そして今日、長年の夢が叶ったのである。
　本来ならもっと早く到着するはずだった。少なくともお昼頃には到着してチャリンコレンタルしてカッパ淵まで猛然と田舎道を駆け抜けていって河童を拝んでやるはずだったのだ。
　あん、寝坊ちゃいますよ。れっきとした仕事でっさ。
　俺は普段から忙殺探偵と呼ばれているくらい忙しいんだ。
　休もうと考える暇もなくボスから指令が入り、難事件を解決するよう余儀なくされる。何もないときでも、どこかへ行こうとすると変な事件が俺を待ち受けている。これが探偵の宿命なのだろうか。引っ張りだこすぎて、自分が有名であることに優越感を抱いている暇すらない。食事もろくに摂れないことが多い。もはや空腹を余り感じない身体になってきた。こういうのを人類の進化というのだろうか。
　常日頃から旅行に出ようとばかり思っていたが、なかなか行く機会がなかったのである。めったに旅なぞ行けないので、せめて本屋の旅行ガイドを立ち読みして旅に行った気分になる程度だった。いや、最近はそれすら実行に移す暇もなかった。なんといってもメディアで話題沸騰の名探偵なのだ。次から次へと事件の依頼は舞い込んでくる。
　何事もないはずだった遠野への出発日も、突如無線に呼び出された。しょうがないので横浜の大黒埠頭へ赴く。そこに堆く積まれている、これからカンボジアの方へ輸出されていく大量廃棄バスの陰に隠れてじっと見張っていた。そして動いた。撃った。要するにアンパンとかタバコさんとか密輸入していた不法入国の外国人とリアル鬼ごっこをしていたんだ。
　どうだ、立派に名探偵稼業しているだろ。
　一連の仕事が終わったあと、事務所に立ち寄らず東京駅の改札をすり抜けて東北新幹線やまびこ６３号に飛び乗り、新花巻で釜石線の最終列車に接続。もうちょっと遅かったら危うく明日までお待ちください状態になるところだった。新花巻、それは新幹線停車駅とは思えないほどの辺境である。ぶっちゃけ田圃のど真ん中だ。
　釜石線は岩手軽便鉄道を前身とする路線で、宮沢賢治にあの有名な童話のアイデアをもたらした路線である。一応ターミナル駅であるはずの新花巻で周囲の様子を伺い、なんとなく過疎チックな予感はしていたのだが、窓の外は田圃と森しかないというとんでもない田舎の路線だった。乗客も一車両に二、三人しか乗っていない。幽霊でも出てきそうな雰囲気だった。
「ご乗車ありがとうございます、釜石線釜石行きです。途中主な駅の到着時刻をご案内して参り

ます。宮守駅二一時一九分、遠野駅二一時四九分、終点釜石には二二時四四分の到着予定です。次は小山田に停車いたします」
　列車の走行音がうるさくて聞き取りにくかったが、車掌はだいたいそんなことを言っていた気がする。俺はというとその放送を子守歌にして狸寝入りを決め込んでいた。夜だし窓の外を眺めていてもしょうがない。
　結局そのまま爆睡し、後になってからちょっと見ようと思っていた「銀河鉄道の夜」のモデル、土沢駅を見逃してしまった。まあ帰りに拝めばいいか。
　そんなわけで遠野到着。列車から降りる。列車は汽笛を上げて闇の彼方へ走り去っていく。後にはなにも残らない。
　真っ暗で何も見えない。寒い季節でもないのに肌寒さを感じる。空気が新鮮なのだろう。
　改札口は階段を渡って向こう側だった。顔の部分がくりぬいてあって子供が顔を出して写真撮影のできる河童の看板が置かれていた。
　改札のおじさんは居眠りをしていた。売店はシャッターが降りていた。ウェルカム・トゥ・遠野！　と自分で叫んだ。足下をゴキブリが高速で通過していった。
　待合室のような場所を通り過ぎ、駅舎からついに駅前ロータリーへ繰り出す。長年夢見ていた遠野の町に到着である。
　駅の左手側にはこぢんまりとしたうふふ街が煌々と明かりを宿していて、暖かさのあまり危うく足が向かいそうになったが自重しておいた。
　実を言うとそこが親不孝通りと名付けられていることを知って出端を挫かれたのである。そこら辺の看板に書いてあった。一度萎えた欲求を取り戻すのは不可能に等しい。旅館まではそれなりの距離があったが、一人寂しく徒歩で移動した。元々歩いて移動するつもりだった。
　東北の夜は肌寒い。長年ハードボイルドを心がけてきたつもりだったが、こんなことでへこんでいるようでは駄目じゃろうと自嘲した。もっとタフな男になれと母ちゃんはいつも言っていた。俺は母ちゃんの言うことを守ったつもりだったが、どうなんだろう。
　暗かった。予想よりも距離があった。夜で前が見えないから距離を感じるのかもしれない。
　道は意外と入り組んでいる。この辺りがかつてはちょっとした城下町だった証拠だろうか。地図に書いてあった釜石街道がどのようにうねっているのかさっぱりわからない。この道は本当にローマ、いや釜石に通じているのだろうか。ローマと釜石ではどえらい違いである。釜石って日本のどこだかいまいちわからない。ローマの位置に確固たる自信があるわけでもないけれど。
　事前に地図は確認していたものの、歩いてみると一気に不安になった。どこで道を曲がればいいのかよくわからない。地図が正しかった試しなんてあったものじゃない。
　駅前通りはシャッターが閉じられていたものの、人の住んでいる形跡はかろうじてあった。けれどもちょろちょろ流れる川を渡るともうすぐに町外れで、得体の知れない森が道路に迫りだしてきている区間もあった。暗闇の中、それらは物の怪のように見える。
　さすがは遠野である。期待していただけの霊的環境は備わっていた。怪しい雰囲気がゆんゆんする。おいそこ、一番怪しいのはお前だってつっこむな。ある意味その通りだから反論しようがないじゃないか。この町の住民からすれば俺は不審者である。

暗闇の中、どうにか目印となりそうな建物を探していった。最終目標は学校だった。その側に今回お世話になる旅館があった。俺はほっと一息ついた。俺の道順は正しかったらしい。存外に珍しいことである。
旅館というよりも個人邸宅を宿泊施設に改造したような場所だった。看板も出ていなかったが住所が正しいのできっとここで間違いないだろう。ピンポンダッシュしても返事がない。そもそもダッシュしていない。いや、そんなの関係ない。ドアは開いていた。
……たのもう。
太郎冠者みたいな声で挨拶したがやはり返事はなかった。玄関を入るとすぐにロビー券食堂があって、おしらさまが祀ってあった。桑の棒の先端に男女の顔を描いて衣服などをあしらったものである。遠野に古くから伝わるもので、良いことや悪いことを知らせてくれる神様らしい。事前に調べた通りの外見だった。
そしてなんとなくだが、おしら様が一瞬動いたような気がした。
見間違いだろうか。きっとそのはずである。
気を取り直す。さすがに超常現象がこんなに早く起こるはずがない。いくらなんでも早すぎる。心の準備ができていない。
静かだ。この建物にホモサピエンスはいるのだろうか。本当に営業しているのか怪しい旅館である。お化け屋敷だと言われても信じてしまうだろう。自動販売機の音がうぃんうぃんする以外、周囲には音を立てるものも動くものもない。それでも周囲を見回した。気が付くと、テーブルの上には置き手紙があった。創英角ポップ体のような文字で以下のように書かれていた。

「羽黒様。本来なら到着をお待ちするのが宿屋として当たり前なのですが、到着が遅いので大変申し訳ありませんが先に就寝させていただきます。どうかご乱心なさらないで下さい。お客様の部屋は二階の一番端の部屋でございます。ごゆっくりおくつろぎ下さいませ。支配人」

うん、このアバウトさが気に入ったぜ。これから四日ほどお世話になる宿にふさわしいじゃないか。俺の目は常に正しい。濁天トラベルを巡回していてティンと来たんだ。いや、ここら辺でもっとも安い宿を選んだだけだったのだが。
清潔そうな階段を登って二階へあがった。
部屋は質素だが決して悪くはなかった。この俺が乱心なんてするわけないじゃないか。隅には電気ポットとここに来て狭山茶のティーバックがあり、有料チャンネルは２番のようだった。中央には厚手の布団が何枚も重ねられている。東北の夜は肌寒い。そして俺には彼女がいない。ガッデム。部屋は十二畳。むしろ広すぎる。
とくにやることもなかったので寝ることにした。迅速な行動が物を言う。それに、睡眠は命よりも大切であるとニート２３６号が語っていた。おおむね正しい。このような定義には疑問を挟んではいけないと今は天国のおじいちゃんが語っていた。これぞ俺の付和雷同ライフである。ワイフも付和雷同してくればいいのだが。
寝る。

寝るぜ！
布団を被った。
懐かしい臭いがした。
ここで科学的豆知識。布団に染みついているあったかい「太陽のにほひ」というのは、死んだバクテリアのスメルなのである。むっふん。
……。
ごめんな、俺も知識をひからけしてみたかったんだ。いや、ひらかけ……、ひけらかしてみたかったんだ。悪気はないんだ。許したまへ。それにいささか舌っ足らずである。ここ萌え要素。
静寂。
誰に話しかけているんだ、俺。
部屋の中は静寂に包まれている。いや、この遠野という土地自体が真っ暗な静寂という帳に包まれ、朝までの時間、日本地図から姿を消すかのごとく、静止している。そこで生命活動を続けている自分とは一体何者なのだろうか。やはりしょせんは余所者なのだろうか。都会だと当たり前なのだけれども。隣りは知らぬ人ばかりである。だから俺が出動しなくちゃいけないような事件も起こりやすい。
俺は気を紛らわす方法を考えていた。頭の中でゴダイゴの「銀河鉄道９９９」が再生されていた。先ほど乗っていた釜石線が「銀河ドリームライン釜石線」という愛称を有していたからという単純発想である。ちょっと古いか。気にするな、こういう人間だ。
羊を数えるがごとく曲の最後となる英語のフレーズが９９９回くらい再生された頃、部屋の片隅からなにやら怪しい物音が聞こえてきた。
……。
何だろう。
さきほどのおしら様ではない。
もっと巨大である。
響く重低音がそれを語っている。
もしや、河童だろうか。
そう、俺は河童に会うために遙々遠野までやってきたんだ。
誰も信じてくれないかもしれないだろうが、俺は日本一の河童フリークなのである。河童フリークが俺以外に存在するかどうかは知らないが。
とにかく、名探偵稼業を続けながら古今東西の河童伝説を調べ尽くしてきた。捜査の空き時間はこれに没頭していたと言っても過言ではない。
そして最終決戦地がここ、遠野だった。
知識人クニオ・ヤナギダの「ザ・レジェンド・オブ・トオノ」によると、遠野の河童は顔が赤いらしい。まさに河童の中の河童様である。
そんな河童が現れてくれていたのなら本望だったのだが。
すっと。

　なんとなく予感はしていたが、本当に見えるとは思わなかった。よりにもよって、遠野へ来た初日のことである。
　ドアの向こう。
　視界の端に見えたのは小柄な赤い着物の裾。絹のような、すらりとした衣装。
　昔ながらの和服だが、鮮血のように鮮やかな紅。俺にとっては見慣れた色ではあるかもしれないが、脳にそれをしっかり刻みつける色だった。
　印象に残ったのはそれだけである。あまりにも一瞬の出来事だった。
　もうすぐ寝ようとしてぼやけていた俺の目線は慌てて対象を追ったが、確固たる画像を捉えるには時間が足りなかった。
　すぐに見えなくなった。
　ぽん、ぽん、ぽんと乾いた音を響かせながら、それは立ち去っていった。
　明らかに自分は異質なものを目撃したのは事実だった。
　まどろみの中から一気に引き戻される。俺は慌ててその場から跳ね起きた。眠気はどこかにすっ飛んでいった。
　犯人を追うより素早く廊下に出て周囲を見回した。もちろん真っ暗で前後もおぼつかなかった。
　非常口のピクト君が眩しく勇ましく輝いていた。リノリウムの廊下が妖艶な緑色に照らされていた。
　空気はしんとしている。吐く息が白かった。廊下には群青色の空間が広がっていて、小さい埃がキラキラと星屑のように輝いていた。
　間違いなくそこには何かがいた。
　床にいわゆる水滴は付着していなかった。それでも河童の期待は捨てきれなかった。しかし、見たのは赤い着物のようなものである。ちょっと違うだろうか。河童ではない、何者かがここにいたのである。
　入り口にあったおしらさまの怪訝な動作は見間違えの類で脳内処理できる。しかし、今のは間違いなく何者かがいた。こればかりは断言できる。赤い着物を身にまとった、おそらくは女の子。顔も見ていないのに、彼女がニヤリと微笑む姿が容易に想像できた。目や鼻は見えず、口元だけが三日月のように歪む。

　ねぇ、一緒に遊びましょうよ。

　俺は首を振った。それはおそらく幻聴だった。動揺するんじゃねぇ、俺。正体をこの目で確かめるんだ。
　颯爽と階段を降りていき、到着したのはロビー。おしらさまがまだそこにあるのを一瞥すると、俺はおもむろに靴を履いてトントンと床に音を響かせた。その音は異様なまでに拡大されて聞こえた。俺の耳に問題はなさそうである。
　がらりと扉を開き、旅館の外に出た。墨汁にスミレの雫を一滴垂らしたような夜空の下、地元の高校が隣にあって、頼りげない街灯が周囲を照らしていた。チカチカと網膜が点滅している。

探偵の勘を活かして調査を試みるが、生憎周囲に足跡の類はない。そもそもあの未確認移動物体が外へ出たという保証もない。まだ旅館の中にいるかもしれないが、それはなんともいえない。
　東北の夜はめちゃくちゃ肌寒い。一度それを見失ったと認識すると、体中の神経が再び反応を始めた。
　何だったのだろう、今のは。
　星も見えない夜空に問いかけた。相変わらず重苦しい空気が流れていた。宇宙とそのまま繋がっていそうな空である。
　まあ、俺が見たのはなんとなく、人に危害を与えそうな奴ではなさそうである。問題は特にないだろう。そう、心の中で何回も復唱した。俺の勘違いだという可能性もゼロではない。
　寝ることにした。
　おやすみなさい。
　寝よう。
　うん。

※　※　※

　目が覚めると自分の身体が巨大な虫に変貌を遂げていたはずもなく、何気ない穏やかな朝だった。ただし窓の外の雲行きは怪しかった。
　窓を開けて周囲を眺めてみる。昨夜は気が付かなかったが、この辺りはまだ民家が多そうだ。しかし、ちょっとでも郊外へ出ると自然がいっぱいである。東京とは比べ物にならない。そこら辺にある空気が違う。雰囲気も山の裾にある小さな里である。首都圏よりも雲が低く流れているような気がした。
　濁天トラベルで選択したのは素泊まりプランだったので、朝食はどこかで食べようとしていた。しかし不思議と腹は減っていない。昨日から何も食べていないのになぜだろう。犯人との格闘の末、よほど体力を消費していたんだろうな。疲れると食欲も失せるたちである。
「おはようございます」
　朗らかで気さくな女将さんが挨拶してくれた。漆黒の髪は大ざっぱにまとめ、ツヤツヤしすぎている肌が電球のように輝いて見える。美人というわけではないが、誰がどう見ても純然たるめちゃくちゃいい人だった。見た目は四〇代後半といったところだろうか。やさしい笑顔が素敵である。実年齢はそれよりも若干上である可能性が高い。探偵のちょっとした勘である。
　結婚指輪が銀色に光っていた。それと、長年家事をやってきましたという証明の手先。これぞプロフェッショナル。
「遅れちゃってすみません。連絡入れれば良かったんですが」
　俺はそう、あくまでも申し訳なさそうに挨拶した。
「ああ、いいんですよお。あたしこそ先に寝ちゃって申し訳なかったです。それにしても、部屋がわかったようで良かったわ」
　うふふ、と微笑みを浮かべた。小さい旅館なので心配せずとも部屋はわかる。

後ろの方で少年がなにやら叫んでいた。少年は高校生くらいだろうか。女将さんは一度俺から目をそらし、少年の方を見る。坊主頭を引っ掻きながらなにやら説明している。おそらくは家庭の事情だろう。父さんらしき人物がジャージ姿で現れて、女将さんと何やら話をし始めた。
その会話にしばらく耳を傾けていたが、俺には内容がさっぱり理解できなかった。それはそれはもう、ものすごい岩手訛だったのである。それはもはや日本語を離れた別の言語だった。俺の入り込む余地はなかった。栃木や福島弁などはリズム感が違っていても単語はそれほど変わらないため、頑張れば聞き取れるのだが、ここまで東北も奥まで来るとそもそも使っている単語が全く違ってくるのでからっきしわからない。
しばらく唖然と突っ立っていると、客を待たせていることに申し訳なくなったのか、女将さんがこちらを振り向いた。
「ああ、ごめんなさい。家庭の用が入っちゃいまして。それで、何でしょう？」
急に聞き取りやすい標準語を話しはじめた。この人こそ、真の意味でバイリンガルである。
まあ、言語問題はどうでもいい。英語と日本語をマスターするよりも難易度が高い。
問題はあの部屋についてだ。それと、昨日見たもの。
「あの、一つ伺いたいんですけど」
「なんでしょう？」
「この旅館って、こういうの出るんですか？」
俺は両手を前に出し、全ての指を下に向けてキョンシーのポーズをした。女将さんはそれを察したようである。
「ああ、お客様も見られたんですか」
くすっと笑いながらあっけなく言う。
「座敷わらしがいるんですよ。私、これでも霊感は強くてしょっちゅう幽霊とか見るんですけど、良く赤い服着た少女が鞠を搗きながら遊んでます。確かにあの部屋は良く出ますね。うちは家族代々霊感が強いですし、かなり昔からの話なんです」
赤い、着物の裾。
俺の顔が青ざめるのを感じ取ったのか、女将さんは心配そうにきりだした。
「あの、座敷わらしが良く出るのはあの角の部屋くらいなので、気分悪いようでしたらお部屋変えましょうか？」
俺は首を横に振った。そんなものでめげてちゃいけない。忙殺探偵の名が廃る。別に危害が出たわけではないし。
「そうですか。まあ、座敷わらしを見るのは基本的に幸せのお告げで、これから何かいいことがあると思いますよ。そんなに気にしないで下さい」
俺は河童の方が見たかったのだ、と言いたくても切り出せなかった。
座敷わらし。確かにそちらもフェイマス・イン・トオノだった。すっかり失念していた。そして初日にその洗礼を受けるとは思っていなかった。
この先の数日間、いろいろと思いやられる。

※　※　※

案の定雨が降ってきた。
遠野の雨は冷たい。さながら、かつて別れた彼女のように。
誰か突っ込んでくれ。突っ込み役もいないのか。まあいいか。
本当ならば駅前のレンタサイクルでチャリンコを借り、遠野の名所であるカッパ淵までかっ飛ばして河童を見るつもりだったのだが、こうも雨が降っているとどうしようもない。びしょぬれになって現地人に物の怪だと思われたくはない。
しかたないので今日は駅前から徒歩圏内にある博物館巡りにしよう。
「あ、お客様。本日はどのように過ごされるのですか？」
絶妙なタイミングでやってくる女将さんである。
「いや、本当ならもうちょっと遠くまで行ってみようと思ったんですけどね、」
そんなことを女将さんに話したら、なんと一緒に回ってガイドしてくれるそうだ。入館券が余っているし、解説できる人がいた方がいいでしょう？　とのこと。ありがたき幸せ。これ一枚でとおの昔話村、遠野市立博物館、そして遠野城下町資料館をゆっくり回ることができるのだとか。
昨日は真っ暗で気が付かなかったが、古くからのこぢんまりとした日本家屋が並んでいる落ち着いた町並みだった。
高い建物は特になく、ほとんどが三階建て以下である。それは空が大きく、雲が迫って見える要因の一つかもしれない。空を切り裂く摩天楼のないこの土地、雲の方が人間界を挑発し、接近しているのだろう。
人通りは少ないものの、町の人々は互いに挨拶を交わしながらすれ違っていく。町自体が一つの共同体であることを実感させられる。遠野といえば民話世界のテーマパークといったイメージが強かったが、実際はディズニーランドでも何でもなく、人間の生活範囲内である。そしてその生活範囲内であるからこそ、口承文化が息づいたのだ。
木造の家は鄙びていて、確かに座敷わらしの一人や二人くらい、いないと説明が付かないような気もした。
城下町資料館はたいしたことがなかったのでさっさと済ませ、いよいよ雨が本格的になる前にとおの昔話村に入った。
メインとなる建物の前には柳田国男の銅像があり、入口は民家風で「柳翁宿」の看板がある。彼が物語採集の際に利用した家なのだろう。中も古き良き日本の旧家といった様子だったが、蔵の方に比較的大きい童話の資料館があった。
物語の冒頭の言葉は「昔、あったずもな」、そして締めくくりの文句は「どんとはれ」である。関東圏であれば「めでたしめでたし」と言うのが普通だが、地方によって様々な言い方があるらしい。日本地図が色分けされていて、各地方でどのように物語の開始と終焉を現す文句が広まっているのかを見せてくれる展示があった。なかなか興味深い。
どうせ空いているだろうと思いきや、建物の横に大型バスが張り付いたかと思うと、ツアー客らしき好々爺とオバちゃんズをわんさか吐き出していって、博物館の中は見ろ、人がゴミのようだ

状態と化した。
「ばあさん、あっこにおしらさまあっぺした」
「んだな」
「のんのさま、おめの顔さ似てんな」
「ほでねほでね、桑折のじさまさ似てるべ」
「桑折のじさま？　かだってんでね。ばさまだべした！」
「ばさまへっへっへっへ！」
「あはっはっはっは！」
　桑折というと福島県の町だろうか。一度、寺から松尾芭蕉像が盗まれたという事件の調査のために赴いたことがあったが、わりと田舎の方だった気がする。
　決してマナーが良いとは言えないこの団体は嵐のように館内を蠢き、鳴子こけしみたいな顔をしているバスのおねいさんの時間ですよという鶴の一声ですぅっと退散していった。後に残ったのはバスの排気ガスくらいだった。これから平泉へ向かうらしい。ご苦労なこった。多分金色堂を見て意外と小さいなあと文句を漏らすんだろう、こういう連中は。
　俺と女将さんの大切な時間を邪魔しないで欲しい。こう書くと不倫っぽいが、そうではないのであしからず。
　まあ、ここの展示はなかなか面白かったと補則しておく。レトロな電子紙芝居で展示されていた「たにし長者」は実に良い話である。どこかで聞いたことのあるような話だったが、源流はここだったのかと理解できた。そして、なによりも女将さんの解説がいちいち丁寧で面白かった。この人は観光ガイドの素質が十分あるだろう。
　しかし肝心の座敷わらしについては平面的な事しか書かれておらず、具体的にどこに出没するだとか、探偵としての自分に有益な情報は最後までつかめなかった。捜査なんてこんなものである。もっとも、座敷わらしについて調べ尽くしたいわけではないのだけれども。
　見学後は川沿いの整備された小径を歩き、蔵づくりのような木製の家が軒を連ねる中央通りにぶつかって右折し、豪華なホテル脇の坂道を登っていった。舗装された道路にも枯れ葉が積もっていて、人通りは少なそうだった。しばらくするとちょっと異質な赤い建物が見えてくる。図書館や博物館などといった、遠野市の複合施設である。
「お客さんはどうして遠野へ来ようと思ったんですか？」
　女将が突然質問してきた。世間話をしているような感覚である。
「普段から超多忙でして、たまには落ち着いた場所でゆっくり観光したいなと思ったんですよ。でも、有名な観光地だと人も多くてうざったいだけでしょう？　まあ遠野も十分有名だとは思うんですが、落ち着けるかなとは思ったので」
「なるほど。ここを選ぶとは、お目が高いですね」
「恐縮です。あと、河童を見たいというのもあります」
　俺がそういうと、女将さんはいきなり笑い始めた。
「お客さん、真面目な顔して結構子供心にあふれているんですね。いやぁ、私も見習わないと……おばさんの階段を順調に上がっているから」

俺ってそんな老けた顔をしているだろうか。これでもまだ二〇代後半なんだけどな。もちろん非婚である。
俺は女将さんにそんなことないですよ、と言いつつお茶を濁した。実際女将さんの方が内面は若々しかった。遠野名物を語る時の目の輝きといったら、おもちゃ売場でウィンドーショッピングしている少年のようである。
遠野市立博物館は落ち着いた雰囲気で人気も少なく、なおかつちゃんとした展示が揃っていて面白かったと言えよう。収穫も多かった。
「こちらが遠野で昔から伝わる農耕機具ですね」
「これは、案山子？」
「はい。こういった農村では案山子文化が非常に発達します。様々な表情があるんですよ」
「案山子ねぇ」
雨月祭と書かれた襷を垂らしている藁人形のような案山子がいた。片方は目がつり上がっていて確かに恐ろしいが、もう片方は失敗した福笑いのような表情である。果たしてこれで鳥が逃げていくのだろうか。ゲラゲラ笑って悶絶するかもしれない。
「とおの昔話村がファンタジーの博物館なら、こっちは地域の郷土資料館です。遠野の郷土は昔話と切っても切り離せない縁があるので、昔話関係の展示が多くなっちゃいますけどね……。あとはオカルト、とでもいいましょうか？」
「オカルト？」
「河童とか座敷わらしの類ですよ。ここではそういった噂にちょっと学術的なアプローチを試みているんです。どうぞ、こっちの方へ」
座敷わらしについての説明が為された一角に案内された。中央にはパソコンがあって、情報を引き出せるようである。壁には様々な展示があり、俺は一つ一つ丁寧にそれらを見ていった。
予想外に座敷わらしは種類が豊富なものである。中には夜中にガハガハと騒ぎまくる爺さんや婆さん（ザシキバッコ、ザシキジッコ）という亜種や、男女ペアの小さいもので最も偉大なタイプ（チョウビラコ）もあるのだとか。家の壁からぬぅっと黒い手だけを延ばしているのも座敷わらしの一種だそうだ。ちょっと気持ち悪くてイメージに合わない。最後の奴はなんだか乾涸らびた死体のようである。
そしてどうやら座敷わらしは河童であるという説もあるらしい。川から上がってきた河童がそのまま座敷わらしになっていた事例がいくつかあったり、座敷わらしが河童に酷似しているという情報もあるそうだ。
色々勉強になった。これで昨日見たアレの正体がつかめるかもしれない。そう、博物館の出口をくぐりながら確信した。
ついでに近くにあった南部神社も見学した。青い葉っぱを抱えた青い河童の置物がここにもあって、水がちょろちょろ流れている。よく見ると非常にひょうきんな顔をしていた。河童の隣りには「この水は歴代遠野南部藩主（お殿様）が愛用された水です」と書かれている。
この町はよほど河童が好きなのだろう。俺とのシンパシーを感じながら、帰路に着こうとした。
中央通りを進み、あえりあ遠野という大規模なホテルの角で女将さんは立ち止まった。ちょっ

と買い物をしてくるので先に帰っていて欲しいとのことだった。彼女は申し訳なさそうな表情でいっぱいだった。俺はむしろ一日中案内してくれたことを感謝し、女将さんと別れた。東北へ旅行する度に感じるが、実に良い人ばかりである。この親密感を少しは東京に分けて欲しい。
　一日はあっという間で、もう夕方である。雨は本降りになってきたようだった。
　さほど歩いていないはずなのにものすごく疲れていた。昨日のアレがまだ抜け切れていないのだろう。
　ふと、旅館への帰り道になにやら雰囲気の良さそうな神社を見つけた。
　鳥居の隣に巨大な石があり、「山神」と書かれている。鳥居の奥にはずっと階段が続いていた。雨の中、神社の境内は霊的な気配を醸し出している。
　ひょっとしたら、ここなら河童に会えるかもしれない。
　そんな期待を抱いて階段を上っていった。雨が石の階段をヌメヌメとさせる。河童よりもトトロが出てきそうな雰囲気だった。どこかでカエルがゲコゲコ鳴いていた。
　そこは多賀神社という場所だった。隣の知恩寺という寺とほぼセットになっている。神社といえども、巫女さんが常駐しているわけでもなしに、人の気配もなかった。ただそこに信仰の対象が佇んでいるだけだった。それでいてもっとも霊的な空間だった。雨がそうさせたのだろうか。
　そして神社の奥に道がさらに続いている。ほんの興味本位で、俺は階段をひたすらあがっていった。
　明らかに観光客が通ってはいけなさそうな道だった。しかし、道であることには間違いなかった。
　女将さんの言うことを守って素直に旅館へ戻っていればよかっただろうか。そもそも、療養するために遠野へやってきたのに、これでは全く療養になっていない。むしろ普段のようにあくせくと資料厚めをしている。結局のところ、俺自身が忙しくしているだけなのだろうか。自分自身に問いつめてみても答えの出ない問題だった。
　忙殺探偵と頭の中で自分のあだ名をつぶやきながら歩いていると、やがて舗装された道路に出た。自分は好奇心に身を任せ、一体どこへ迷い込んでしまったというのだろうか。ここは果たして、まだ遠野のままだろうか。
　曇天の中、丘の上に並んでいる墓石だけが、雲の隙間から覗く太陽光に照らされて輝いていた。
　木漏れ日が墓石を照らし、絶えず魂が上昇しているような感覚を覚えた。
　そこは天気の境界線だった。
　自分はその線上に屹立していた。
　不思議な感覚を起こさせた。
　俺はしばらく墓石たちの群の前で立ちつくした。この墓はおそらく知恩寺に属するものなのだろう。誰が埋められているのかはわからない。けれども、俺を吸い寄せるような力がそこにはあった。
　遠野、侮れない土地である。
　今まで探偵稼業を行い、諸国を行脚してきたが、これほどの異空感に包まれたのは初めてだった。俺はジョン・デンバーの「ロッキーマウンテンハイ」を口ずさみながら山道を歩いてい

った。気を紛らわせるためでもあった。
　そして歩くこと数分、俺は愕然とした。
　そこに見たのは赤茶けた建物。
　それはデジャビュの類ではなかった。幻でもなかった。
　気がつけば先ほどまでいた遠野市立博物館に戻っていたのだ。
　一体何が起きたんだ。どうして俺はこんなところにいるんだ。
　市立博物館は先ほど見学を終えて、町中を通って今はふと旅館への道を外れただけじゃないか。
　なぜか恐怖に震えた。
　後で地図を見れば鍋倉公園の麓の道で繋がっていて、何の不思議もないことだったのだが、そのときばかりは全く異なる空間にワープしてしまったような気がしてならなかった。科学で説明のつく至極単純なことなのに、驚いてしまっている自分がそこにはいた。
　葉っぱの水滴に映し出される逆さまの風景。足下から鬱蒼と生い茂る木々が支配する空間。この中に一歩足を踏み入れてみれば、自分は元いた世界に戻ることが出来るだろうか。ふと、そんなことを考えてみた。
　市立博物館の閉館時刻までまだ時間があったので、俺は駄目元で再入場を試みた。受付に人はおらず、いくら呼んでも返事がなかったので勝手に入ることにした。一度入場した人間だからどうせ問題ないだろう。
　再びじっくりと展示物を見入った。閉館時刻になるまでずっと居座った。雨はいつの間にか止んでいた。結局館内で人に出会うことはなかった。
　藁で作られた案山子や農耕機具などといった物品もあり、なかなか楽しませてくれる。昔からツバメが低く飛ぶと雨が降るなどといった言い伝えの類があるが、ここ遠野にはさらにバラエティー豊かな謂われがあり、展示スペースの間の柱に書かれている。いちいち面白い。太鼓や、なまはげに似た伝統文化もある。
　こんなに展示は充実しているのに、人気は少なかった。真面目に見学すればきっと楽しいのに。きっと観光バスのルートに入っていないのだろう。
　再び座敷わらしについて扱ったスペースに足を踏み入れた。興味深い説明もいろいろあった。ここまで目撃談が多いと、座敷わらしは冥王星の存在よりも確かなものに思えてくる。いない方がおかしい。
　部屋の中は薄暗く、誰も使っていないパソコンの画面に赤い着物を身にまとった座敷わらしのイラストが浮かんでいた。

　ねぇ、一緒に遊びましょうよ。

　そう、語りかけているようだった。

　　※　　※　　※

町を通って旅館に戻った。
すでに買い物を終えていた女将さんが優しく挨拶をしてくれる。自分がどこへ行っていたか詮索はしないようだった。
一通り自分のことを済ませ、再び布団に潜ったのが夜八時頃。外はすでに真っ暗で、女将さんも床に就いたようである。このなんとも言えない田舎の時間感覚が心地よかった。滅多に味わえるものではない。今までナポレオンのような時間感覚に追われていたので、八時に布団を被ってもむしろ眠れなかった。
ゴダイゴの「銀河鉄道９９９」も名曲だがさすがに飽きる。気分を変えて「モンキーマジック」を唱えようとしてみたが出だしのメロディーを忘れてしまった。アチョーッだけは覚えているのに。俺はどうしてゴダイゴに拘っているのかよくわからなかった。古すぎてライトノベル読者がついてこないではないか。いかんいかん。
今すぐ旅館を抜け出して駅前の繁華街に行けば楽しめるだろうか。いや、俺はたとえマザコンと呼ばれようが母ちゃんは一生慕っていたい。あの親不孝通りをふらついて、やれ親不孝だと呼ばれるのはごめんだ。
「お兄さん、どうしたんですか？」
ふと、声がした。
確実に俺の耳はちょっとロリっぽいその声を拾った。
何なんだ、今のは。どうやら幻聴ではなさそうである。鼓膜は張り詰めた空気の中を伝わってきた音のウェーブをしっかりと捉えている。今度ばかりは気のせいだと言わせない。
これは紛いようもない現実だ。
背筋が凍っていく。畏怖すべき対象に入っているわけでもなしに、ただ見知らぬ現象が生じていることが不穏だった。今朝の女将さんの台詞が頭の中でリフレインする。
まさか、本当に座敷わらしなのだろうか。
俺がムンクの某絵画みたいな状態で苛まれている間、そいつは何かしゃべり始めた。
「まさしく、あたしはあなたがたの定義する座敷わらしという存在なのです。その証拠に、ほら！」
気がつけば彼女の顔は自分の目の前にあった。肌はきめ細かくて透き通るような白さ。まだまだ少女だが、その可愛らしさと言ったら国宝級だった。
「ふふっ」
目はくりくりとしていて何もかも吸い込むような漆黒である。
頬が少し赤らんでいて、口元は天然の口紅を塗ったかのようである。まさに美少女。年齢はよくわからないが、人間の基準からすれば小学生か中学生である。
いや、そんな暢気なことは言っていられない。彼女は真っ白な左手を俺の目の前に突きだしている。悔しかったら触れて見ろということなのだろう。
「どうしたんですか？　いきなり出ちゃって驚いちゃいました？」
悪意はなさそうだ。無邪気に、子供が遊びを提案するかのようだった。

　果たして、彼女に触ることができるだろうか。
「ほら」
　しかし、それは俺にとって科学と幻想の根本的問いかけであった。彼女が問いかけている以上にこの行為には意味があった。座敷わらしの実在・不在、ひいては幽霊やその他想像上の産物とされてきた概念が存在するかどうかの瀬戸際なのである。唯物論と神秘主義、どちらが果たして真実なのかが、自分の一挙一動で証明される。
　俺は覚悟を決めた。
　ゆっくりと腕を持ち上げ、方向付けを行った。
「私に触ってみて下さいね。そう、そうやって」
　指先は空を掠める。そこに、対象にぶつかったという感触は存在しなかった。僕の手は彼女の手をすり抜け、反対側に達した。
　そう、彼女に触ることはできなかったのだ。
　俺は愕然とした。目から大量の鱗が乱発射される。
　これほどの衝撃を受けるとは予想だにしていなかった。本当に、こいつは座敷わらしなのだろうか。俺が見ている幻の類なのだろうか。
「ね。言ったとおりでしょう。私、座敷わらしなんです」
　殺人的なほどに完璧な微笑みを見せた。どうやら彼女は本当に人間ではない何者かであるようだ。それとも単なる俺の夢なのか。
「私の名前は合歓子です。ネムコと読んで下さい。どこぞのゲーム会社と一緒にしないで下さいね」
「合歓子か」
　なんだか世俗知識のある座敷わらしである。それとも生きている間ゲームを手に入れられなかった未練で成仏できなかった哀れな子供の魂なのだろうか。
「私は座敷わらしですよ。ザ・シ・キ・ワ・ラ・シ。そんじょそこらのインチキお化けとは違います」
　合歓子は微笑みを浮かべていた。
　俺の中で何かが引っかかっていた。
　そう、今日の昼頃、とおの昔話村で女将さんから聞いたことだった。
　座敷わらしは幽霊というよりも神である。家にいて、蔵の中にいるのは蔵ボッコと呼ばれる。座敷わらしは人に姿を見せることをせず、足音だけを響かせる。姿を見せぬまま家にいるぶんには無害な存在で、むしろその家庭に栄華をもたらしてくれる。逆に、一度人目に触れた後、座敷わらしがどこかに消えてしまったらその家は没落するのだそうだ。
　ポイントは以下のことだった。
　座敷わらしは、子供にしか視覚できない。
　俺は子供ではない。けれども、こいつを見ることができる。
　従って、こいつは座敷わらしではないという論法が成り立つ。
「お兄さんの名前は、なんというんですか？」

「羽黒荘介だ」
　何を恐れてか、本名を答えた。
「お兄さんは、大人ですか？」
　質問の意図がわからなかった。
「遠野の大人は、みんな遠野で成人式を迎えるんです。お兄さんはそれを受けてませんから、子供ですよ」
　言葉を詰まらせてしまった。
　しばらく押し問答が続いたが、合歓子の論理はざっと以下の通りである。
　そもそも大人と子供の定義は日本国の定める法律による二十歳がどうのこうのというのは、はっきり言って座敷わらしには全く関係のないことであり、子供とは地元の成人式を迎えていない存在のことである。
　なんだか屁理屈な気もしなくはないが、しょうがない。座敷わらしが日本国憲法を知っているとは思えない。
　合歓子は今まで何人かの宿泊客に存在を気づかれたことがあるが、その中には日本国憲法の定めるところの「大人」が含まれた。彼らや俺に共通して考えられることは、どうやらまだ子供っぽいところがあることらしい。
　子供っぽいのだろうか、俺って。長年ハードボイルドの探偵を目指してやってきたが、子供と思われるとは思ってもいなかった。
　いや、一つだけ思い当たる節があるとすれば、いわゆるマザコンだろうか。
　未だに母離れしてないし。母ちゃん大好きだし。
　こんなんで座敷わらしをおがめるようになってしまったのだろうか。それはそれで悔しいのう。
「なに悦に浸っているんですか」
　冷静に突っ込みをされる。俺は一気にマザーランドから現実に引き戻された。いや、マザーランドって何だ、マザー牧場か？
「私はお兄さんに会えてうれしいです」
　両手をあわせつつ口元に人差し指を当て、合歓子は嬉々とした様子で語っていた。長い黒髪が背中の方まで続いている。血のように真っ赤な着物は彼女の白い肌を一層目立たせていた。これは彼女にすごく似合っている。
「ここで会ったのも何かの縁です。よろしければ結婚しませんか？」
　またまた、これは高尚なギャグが飛び出したものだ。おかげさまで俺は甚大な精神的ダメージを喰らった。こうかはばつぐんだ！
　冗談はよそう。何なんだこいつは。大人をバカにしているのだろうか。
「妄言の類ではありません。私、合歓子があなたを一生お慕いいたします。至らない点は有るかと思いますが……って、こんなしんみりしてもしょうがないですよね。新婚ライフは楽しくやりましょう。グアムとかサイパンとかポツダムとか行ってわいわい騒ぎましょうよ」
　若干小学生くらいの座敷わらしにそんなことを言われて、俺は一体どうすればいいんだろうか

。かわいいこでちゅねーとあやしながらペロペロキャンディーでも贈呈すればよいのかもしれない。しかし生憎俺には持ち合わせがないし、この町にはコンビニが見あたらない。珍しく作戦がバタバタ倒れていく日だった。
　それにポツダムだけなんか騒げそうにない場所だがそこのところどうなんだろう。気にしない方針で行くべきだろうか。
　計画変更。こうなったらこっちから質問してやる。
「そもそも、どうして俺の前に姿を現したんだ？」
「お兄さんを幸せにするためです」
「俺は人間で、お前は座敷わらしだ。住んでいる世界が違う」
「住んでいる世界は一緒ですよ。人間と非人間でちょっとだけ違うかもしれませんが、恋愛にはちょっとくらい越えるべき壁があった方が熱く燃え上がるとあたしは思うんですよ。お兄さんもそう思いませんか？」
　全然思わぬ。
「悪いが俺はロリコンではない。どちらかというとマザコンに近い」
「そんな難しい外来語、あたしにはわかりかねます」
　すました顔でそう答えた。なかなかのやつである。
「俺は四日後に東京へ帰る。そして座敷わらしはこの土地を守る神様だ。お前がここから消えるということはこの旅館に没落をもたらすということだよ。それでもいいのか？」
「だったら遠距離恋愛ですね。なかなかロマンチックでしょう」
　何が遠距離恋愛だ。先ほどとは矛盾していっぱしに外来語使ってやがるし。とおの昔話村には座敷わらしがこんなにべらべら喋る存在だとは書かれていなかった。看板に偽りありである。それは違うか。
　ともかく会話しているのも馬鹿らしくなってきた。彼女が愛らしいのは事実だが、神秘的な幻想と現実の融合世界に浸っていたのもつかの間だった。俺は全てが夢だと信じることにした。
　ロリっ娘が結婚しようぜと話しかけてきた夢を見たなんて考えたら恥ずかしくて死にたいくらいだが、これが現実の出来事であるよりは幾分マシだった。
「俺は疲れているんだ！　散々事件に振り回されて、ようやく得た休暇なのに、邪魔しないでくれ！」
「私にとってもお兄さんはようやく来てくれたお客さんなんですよ。ちゃんとおもてなしさせてください」
「俺は寝たいんだ！」
「寝て良いですよ」
「それじゃあ、お言葉に甘えてやる。おやすみんみん」
「日本語変ですよ」
「気にするんじゃねぇ」
　そのまま布団の上に倒れる。すると、座敷わらしもおもむろな態度で隣に寝そべった。ごそごそと隣で音がする。

「昔から添い寝にあこがれていたんですよ、ふふふ」
　恐怖は感じなかった。彼女はあまりにもいわゆる心霊のイメージからかけ離れすぎていたのだ。だから余計阿呆らしかった。
　無理矢理目を閉じて耳を塞いでも耳元で何やら話しかけてくる。彼女を思い切ってどかそうと思い、とりあえず持ち上げようとしたが、俺の腕は彼女の体躯をするりと抜けて、触ろうにも触ることができなかった。絶望するしかない。再び横になる。
「いい加減にしろよ！」
「何をどう良い加減にするんですか？」
「自分で考えろ」
「そうやって逃げないで下さいよ」
「逃げてないさ。寝る」
　これ以上どうしようもない。
　おかしいな。濁天トラベルには座敷わらしの出る宿だなんて書いていなかったのに。
　濁天トラベルは日本が誇る旅館とホテルの総合サイトである。探しやすい上、泊まるごとにポイントも溜まっていくから非常に便利である。ここの宿はその濁天トラベルでもいい感じの宿と紹介されていた。
　レビューも比較的好評だったのである。女将さんがいい人だという意見が過半数を占めた。みんな自重しているのだろうか。
　それとも、こいつは名探偵であるこの俺が客だったから出てきたのだろうか。
　座敷わらしは絶えず耳元で語りかけてくる。
「私はお兄さんの好みとは違いますか？　なんなりと要望を言って下さいね。お兄さんの理想的な女性に少しでも近づけるように頑張りますから。何、寡黙な淑女になってほしいですって？　それは私のプロポーズを承ったと解釈して宜しいのでしょうか？　違うんですか。そうですか。ぐすん。そ、それでも、あたしはお兄さんを諦めませんよ。処女の切ない片思いなんですね。むぁ、でも、確かに、いきなり求婚するのは確かに話が早すぎるかもしれませんね。一つずつ積み重ねていくプロセスが大事なんですね。それなら、最初はお友達から始めませんか？　そう、お友達です。みんな仲良しなのです。ひらけポンキッキです。え？　黙ってくれたら友達になってやってもいいって？　わかりましたっ！　これからもよろしくお願いします！　それじゃあ、さっそく静かにしますね。……。……ぬ。……。え？　ずっとそこに居座るなですって、居座っていませんよ、こうして添い寝しているんですよ。いいじゃないですか、私たち友達ですから。もう疲れているから一人で寝かせてくれって？　なんならマッサージしましょうか。手を使うんじゃないんです。ツボを念力で刺激する遠野式フォルクローロマッサージ法です。イェス、高〇クリニックでトリプルＡの安心と信頼をいただきました。いや、嘘なんですけど。効果はありますよ。いい加減黙れですって？　ああ、はい。ごめんなさい……」

※　※　※

五分毎に目を開け、もう座敷わらしが消えたかと確認したが、奴は結局ずっと消えることなく俺の目の前で寝そべりながらぐぅぐぅと息を立て始めた。
改めて見ると本当に愛らしい。こうして喋らずに目を瞑っていれば良くできた人形である。しかしなんというか、喋ると全てが台無しだ。あまりにもトンデモ過ぎて言っていることがよくわからない。
全く、落ち着いて寝ることすらできやしない。悟られないよう布団を部屋の反対側にうつし、電波系座敷わらしから距離を取って再び寝ることにした。
そして朝目覚めると、座敷わらしの姿は見事になくなっていた。

第二章「殺人事件、ジンギスカンラーメン、約束」

　あれは何だったのだろうか。
　べらべら喋るロリっ娘座敷わらし。ポストモダンにおける神の姿。そう、神は死んだのだ！救いの神は死んだ！　これぞ西洋的近代の確立。さらば民謡の時代。
　とかくわけがわからない。遠野っていつからこんなメイド喫茶みたいな場所になってしまったのだろうか。俺は別に短絡的快楽を求めてここへ来たのではない。もっとマリノフスキー的な何かを求めてきたのである。
　夢ではないことは残念ながら明白だった。鮮明すぎる記憶が俺を苛んだ。二日連続で出たのだから、もう縁があるとしか思えない。縁を結びたくはないのだが。
　身を起こし、一人には広すぎる部屋を一瞥した。昨日、この辺りに件の幼女が寝そべっていたのだ。
　女将さんは今日も快活に話しかけてくれた。自分がやや寝不足そうなのを心配してくれた。目の下にクマ出没注意の標識があるという。昨日の騒動のせいだ。
「良く眠れなかったですか？」
「実は、また座敷わらしを見たんです」
「あら、よっぽど気に入られているみたいですね。ひょっとしたらあなたは『まれびと』なのかもしれませんね」
　『まれびと』とは主に折口信夫が研究を進めた来訪神のことである。土着の神様と違い、たまに村へやってきて、村人たちはその神様を丁重にもてなすのだ。俺はその冗談を軽く受け流した。
「あまり座敷わらしには興味ないんですけどね、むしろ休暇のついでに河童の研究をしにここまで来たので」
「そうすると、今日はカッパ淵ですか？」
　さすが長年遠野に住まう女将。鋭い。
「はい。ちょっと軽い汗流してこようかなと」
　幸いにも天気は良好、自転車を漕いでのんびり行こうと思っているとアナウンスしたところ、ちょっと遠いよと注意されてしまった。
「ちゃんとサイクリングコースは整備されているんですけどね。自転車借りるとお金掛かりますし、雨上がりで地面が滑りやすいですよ」
「そうですか……」
　ほんならということで、なんと旅館の自家用車を出してくれることになった。
　さすがに至れり尽くせりすぎるので萎縮したが、遠野の魅力を紹介するのが彼女のレーゾン・デートルであり、一番の幸福だということで、甘えることにした。本当に感謝してもしきれない。
「いいんですよ、むしろ振り回しちゃってすみませんね」
「そんなことないです。勉強になります」
　西武鉄道のような黄色い車の後部座席に乗り込み、女将さんがバタンとドアを閉めた。彼女も運

転席に乗り込むと、多賀神社まで響きわたるほど思いっきりアクセルをふかし、とてつもないスピードで公道を走っていった。
　旅館を出てまもなく、交差点のところにテーブルが置いてあり、二人ほど老人がスタンバっ。
　走り出してすぐ、怪しげなテントが視界に入ってくる。
「あれは何ですか？」
「ああ、通行量調査みたいですよ」と女将さん。「私もよくわからないんですが、今日から遠野市全域でやるみたいです」
　黄色いチョッキみたいなのを羽織ったおじいちゃんが鎮座していらっしゃる。何のためにやるのか本当にわからなかったが、まあご苦労なこった。
　それとも、果たして人間ではなく河童の通行量だろうか。それは非常に面白そうである。
「うぉう」
　首を横に傾げていると女将さんに心配された。
「どうしました？　肩こりですか」
「いや、メーターがちょっと気になって」
「メーターって、ああ、ガソリンはばっちりですよ」
　そうじゃなくて、速度計……というのは赤信号を飛ばしたせいで言えなかった。
　見た目とはうってかわってかなりの運転狂である。びっくりした。
　早渕川が見えると車は右折し、また左折してあとはひたすら国道３４０号を突き進んでいった。スピードがやばい。
「女将さん」
「なんですか？」
「もうちょっと、スピード緩めません？」
「大丈夫ですよ。この車、見た目よりも性能がいいんですから」
　女将さんは嬉々とした表情で語っていた。そういう問題ではない。
　しかし、いざとなると説得の言葉が見つからなかった。速度制限をオーバーしているからと言ったのではポリ公呼ばわりされるし、端的に恐いと言うのは幼稚すぎる。おそらく俺のいかつい外観とマッチしない。
「大丈夫ですか？」
　女将さんが突然聞いてきたので慌てて答えた。しかしこの人は原因を全く理解していない。
「ほら、えーっと、あの……自分、高所恐怖症でして」
　口から出任せを言ってしまった。高所恐怖症って全然関係ないじゃねぇか。女将さんは一瞬首を傾げたものの、すぐに微笑した。
「お客さん、意外と可愛いところがありますね」
「なんですかそれ」
「褒めているんですよ、あ、でも気に障ったらごめんなさいね」
　そしてジェット機のような運転が穏やかになることは最後までなかった。
　町中を突き進み、何度か交差点をスリップしながら曲がり、やがてＪＲ釜石線の踏切を越えた

。謎めいた釜石街道の構造がようやく把握できた。よく考えてみれば、東京の道路よりはずっと簡単である。お互い話すこともなく沈黙が流れ、なんとなく気まずかったので俺は女将さんに質問をした。
「そういえば女将さんの名前伺ってなかったですね。それと、やっぱり遠野については詳しいんですか？」
「私ですか？　遠野柚実と申します。名字と住んでいる土地の名前が被ったのは何かの縁で、毎月遠野の観光を推進する慈善団体で活動しながら旅館やっているんです。お客様にこの土地の伝統と文化を肌で触れてもらって、いい体験をしてもらうのが本望なんですよ」
「岩手訛のない標準語を喋りますね」
「いや、普段はきつい岩手訛ですよ。こうしてお客さんと接する時だけですね、独学でやった標準語を披露できるのは」
　そんなことを喋りながら、いつの間にかこれから向かうカッパ淵の話題になった。トルネードのように車窓は移ろいでいった。
「柳田国男の遠野物語には河童に関する記述があります。遠野の北部を流れる猿ヶ石川には昔から数多くの河童が住んでいたんです。遠野の人々にとって河童とは比較的なじみ深い生物でした。時たま人間にも多大な影響を与えました。ある川端に住まう家庭では、二代に渡って生まれてくる子供が河童ばかりだったみたいですよ」
　俺の背筋がぞっとした。スピードだけのせいではない。
　赤ん坊が全員水掻きを持った化け物であるということ。それは恐怖以外の何物でもない。恐い、恐すぎる。
「生まれてきたのが赤ん坊だと思ったら、手には水掻きがあり、顔は真っ赤で、それはそれは醜い子供だったようです。いろいろと不吉なので、こういった子供は切り刻んで地中深くに埋めたそうですよ」
「わりと壮絶ですね……」
「でも、河童自体は別に悪い奴とは限らないんですよ。これから行く猿ヶ石川ほとりのカッパ淵には有名な逸話がありましてね。馬にちょっかいを出して村人たちに捕まった河童が殺される瀬戸際だったんですけど、一人の和尚様が結局許してやって、その後常堅寺で火災があった際に、その河童が恩返しとして火を消したそうなんです。今でもその常堅寺にはその河童を讃えて、河童の狛犬が設置されているんですよ」
　その昔話に関しては調査済みだったが、知らない振りをしてふんふん言いながら女将の話を聞いた。それでもいまいち集中して話を聞けなかったのはさきほどから車のスピードメーターがあらぬ方向へ倒れ込んでいるからだ。車窓は一面の田園風景であるにもかかわらずめまぐるしく変化して、せっかく付近をぶらついていた河童も逃げてしまいそうだった。
　そして、その日のうちに河童と遭遇することはなかった。

※　※　※

嫌な予感はしていたさ。
俺が休日を満喫できることなんて滅多にないんだ。なんていったって、天下無敵の忙殺探偵だからな。
俺が忙しくして他人を殺すんじゃない、俺が殺されそうなくらい忙しいだけである。事件への遭遇率だけで言えばきっと、かの有名なシャーロック・ホームズにも負けていない俺。問題は解決できるかどうかなのだが、とりあえず俺が言いたいのは、探偵の素養として事件への遭遇率という重要なファクターがあることを読者諸氏は肝に銘じて欲しい。とにかく女将さんと行動している間、いつもの胸騒ぎが収まらなかったのである。
念願だったカッパ淵だけでなく常堅寺や伝承園の見学も済ませ、再び旅館へ戻った。河童に会うことが出来なかったのは少し残念だったが、心配せずともまだ数日滞在時間はある。俺の忙しい日常に戻る前に、ひとたび会うことが出来れば本望である。
「お客さん、大丈夫ですか？」
車の後部座席からミラーを見ると、時たま女将さんと目があった。どうやら俺の顔色が良くないらしい。なんだろう、そろそろこの高速移動物体には慣れてきたのだが。
「ああ、体調は大丈夫なんです。ですけど……」
「デスケド？」
「ちょっと、嫌な予感がありまして」
「ああ、その気持ちわかります。私も霊感持っているので、たまにそうなりますよね。それで案外当たったりするんです」
物わかりの良い女将さんである。これで車の暴走さえやめてくれればいいのだが。ああ、またトラックとぶつかりそうになった。回避回避。ハラハラする。
「仕事柄よく事件に遭遇するんですけどね、だいたい直感というか、嫌な予感が当たるんです。悪運が強いのかな？」
「なんだかおしらさまみたいですね」
女将さんはそう言って朗らかに笑った。
おしらさま、か。
有名な逸話である。遠野で語り部によるお話体験を行うと、だいたいこの昔話が選ばれるとガイドブックには書かれていた。それほど遠野では有名な話なのである。そして、とても悲しいお話だ。
とある所に女性がいた。その女性は一匹の馬を愛するあまり、ついに馬と夫婦の契りを結ぶに至った。まあ、馬とやっちゃったのである。それに気づいて激怒した父親は馬を娘の知らぬうちに桑の木にぶら下げて殺害してしまった。後日、娘は嘆き悲しみ、馬の首にすがって泣いていたところ、父親は見かねて馬の首を落とした。娘は悲しみのあまり馬とともに天へ登っていってしまった。ざっと、このような話である。
それ以来、馬と女性のペアでおしらさまと呼ばれるようになった。養蚕の神様であると同時に、危機を知らせてくれる神様としても有名である。
「遠野ではおしらさま信仰がしっかり根付いていて、うちの旅館にも当然於いてあります。うち

の子供達も慕っているみたいですね」
　ああ、あれか。俺が旅館に到着した時、なんとなく動いたような気がしたが、あれは見間違えではなく、何かの暗示だったのだろうか。
　俺が考え事をしていると、遠くから甲高い音が聞こえてきた。ＪＲの踏切が鳴り、遮断棒が降りてきている。女将さんは明滅する赤いランプを一瞥した。
　ミラーに映った女将さんの瞳がキランと輝いた。それは普段の女将さんからは想像も付かないほど鋭い視線だった。
「可能ね」
　猛然とアクセルをふかし、ガタガタとものすごい揺れを伴いながら踏切を通過した。
「ちょ、おま……」
　踏切カンカン鳴っているから待ちましょうよと言う暇もなかった。車内はガタンガタン揺れ、何度か天井の取っ手に頭をぶつけた。
「ちょっと揺れるので注意して下さいね」
　今更言っても遅い。女将さんが注意を促した時にはもう既に、決死行は終盤を迎えていた。
　再び平坦な道路に戻る。俺は座席がらずれて前のめりになっていた。体勢を整え直す。
「良かった。あやうく一日十本くらいしかない列車待ちをするところだったわ」
「ものすごい運転ですね」
　いろんな意味で。
「ありがとう」と女将さん。この人は完全に褒められたと思いこんでいる。ソクラテス反語法をまるで理解していないようだ。
　俺は後ろを向き、遠ざかる踏切を見ていた。右側から普通列車がやってきていた。それにしても、なんだか遮断棒の数が足りない気がする。
　俺は前を振り返った。女将さんの運転は一見遮断棒を回避したかのように見えたが、よく見たら車のフロント部分に黄色と黒の棒がのっかっていた。女将さんは気づかず片手でハンドルをぐいぐいやりながら音楽プレイヤーをいじっていた。
「女将さん、それ」
　車の前方にひっついた棒を指さす。女将さんも気づく。
「あ、あらいやだ」
　女将さんは終始笑いっぱなしだった。俺は目も当てられなかった。
　宿に着き、女将さんは車を止めると、長い遮断棒は地面にカタンと落ちた。端っこが無惨にひん曲がっている。どうみても遮断棒です本当にありがとうございました。
「これで二十三本目ね……」
　女将さんが意味深なことをつぶやいた。

※　※　※

　受話器に向かってぺこぺこ頭を下げていた女将さんは、ようやく用件を終えると、深いため息

と共に電話を切った。警察と保険会社とＪＲ東日本の三社を敵に回してこれから交渉が進んでいくらしいが、それはまた別の話である。見た感じこういった事例に相当慣れていそうだ。こちらは心配ないだろう。
　全てを終えた女将さんはこちらを振り向くと、再度深く頭を下げた。ようやく旅館の女将としての遺憾の意が生じてきたらしい。
「申し訳ないです、本当に」
「いえいえ。そこまで謝らなくても。なんかほら、ちょっとスリルがあって楽しかったですし」
　口から出任せが沸いてくる。
「どうも、ハンドルを握ると性格変わっちゃうみたいなんですよね」
　ここでまさかの二重人格宣言だろうか。いや、そんなにこじれた話ではない。ただ単にスピード狂なのだろう。
「冬の雪道で華麗な三回転スリップを決めてからは、そういった運転から卒業しようと思っていたんですけど、どうにもやめられなくて」
　良くここまで生きてこられたな。きっと踏切だけでなく、様々な修羅場をくぐり抜けて来たのだろう。それだけでも奇跡に近い。
「お詫びに何か、お食事でも出しましょうか？」
「いや、いいんだ。別に腹は減ってない」
「そうですか……」
「それよりも今日の調査結果をまとめたり、休憩を摂ったりしたい。部屋でくつろぐことにしますよ」
　実を言うと、俺がカッパ淵で感じた嫌な予感は解消されていなかった。なんとなく、探偵としての勘がうずくのである。
　先ほどの踏切接触事故は単なる事故であり、予測不可能なものだし俺の勘とは関係ない世界の事故である。もっと人為的かつ凶悪的な何かに俺は反応していた。
「それじゃあ、どうかゆっくり休んで下さい。変な事件に巻き込んじゃって本当にすみませんでした」
　この程度の事故なら甘いものである。いちいち動揺していたら名探偵の名が廃るじゃないか。俺は女将さんに手を振ると、階段をすたすたと二階へ上がっていった。
　嫌な予感は増幅していった。
　この感覚は勘だとしか説明できない。科学で合理的に説明できるものではない。本来であれば、それは探偵としての合理性に反する。徹底的な科学主義こそ捜査の基本だからである。しかし、俺は勘やら非科学的な事象やらを否定するつもりはないし、それらに少しは頼って今まで捜査をしてきた。これでそれなりに成功しているのだから、きっと大間違いではないのだろう。
　予感は具体性のある事象に転化し、推測は確信へ昇華した。これは間違いなく血液のにおいだった。どこからともなく漂ってくる。
　この旅館のどこかに死体がある。それも、つい先ほど殺されたばかりの。
　これは殺人事件だ。

　どうやら間違いはなかった。俺は大声で女将さんを呼んだ。
「ちょっと二階へ来て下さい」
「なんですか？」
「いいから、早く！」
　女将さんは最初、何事かわからない様子だったが、俺の表情を見るなり何かを察して、二階の部屋を全てチェックして回った。他の部屋には特に異常はなかった。
　最後に残っていたのは、俺の部屋だった。

※　※　※

　まもなく、警察がぞろぞろやってきた。遠野の交番に駐在している者が岩手県警のお偉いさんを案内していた。県警のお偉いさんは憮然とした態度で周囲を見回していたが、遠野のお巡りさんは滅多に起こらない異常事態にすっかり腰を抜かし、お化けでも出たかのように声を上擦らせて何かを叫んでいた。
　その間、俺は蚊帳の外に立たされていた。いや、自ら捜査の中心へ入っていくことを断念したのである。
　奴らの会話が解せない。本当に。英会話のコマーシャルで外国人に囲まれて孤立してしまう哀れな日本人の姿が頻繁に見受けられるが、まさに今の俺がそんな状態だった。
　集まったのが岩手県警や地元のお巡りさんばかりだったのでまさかとは思ったが、岩手弁にもほどがある。もはや日本語ではない。
　名探偵である俺が言語の問題で捜査の渦中へ食い込めないなんて。至極屈辱的である。
　仕方ないので、俺は女将さんに通訳を依頼し、事件の詳細をざっとまとめることにした。
「すみません、動揺しているところ申し訳ないんですが」
「はい。もう私どうしたらいいかわかんなくて混乱していて、自分のこと考えられなくて頭まわってなくて、いかなる感情も沸いてこないです。むしろ単純作業に没頭した方が気が楽ですから、なんなく私を使って下さい」
「本当にすみませんね、それじゃあ、警察の言っていたことを……」
　女将さんは口元に手を当てながら、丁寧に岩手県警の岩手弁を翻訳していった。本当に助かった。
　まずわかったこと。驚くべきことにこれはれっきとした密室殺人事件だった。警察が何やら騒いでいたのはそのためらしい。
　翻訳にはかなりの時間を要した。女将さんが悪いのではない。彼女は優秀なバイリンガルである。問題は、情報量があまりにも多すぎるということだ。普段から事件になれている俺のような探偵であれば集中して聞けるものの、一般人が自分の経営する旅館でまさに殺人事件が起こって動揺しているのに、俺が無理を言って翻訳を頼んでいるのだから、そりゃキャパシティーオーバーになってもしょうがない。
　女将さんの配偶者である父さんも駆けつけてきた。高校生くらいの男子もいる。きっと息子な

のだろう。昨日の朝に見かけた少年だった。
　しばらく混乱が続いた。しかし女将さんはめげなかった。一生懸命事態の収集に回った。
　そして事件は整理された。バラバラだったパズルの輪郭が垣間見えた。
　簡単にかいつまんで話そう。
　死亡したのは女将さんの所属する民間非営利団体の代表、早渕三蔵氏。
　周囲の意見を聞かないで自分の信じた道を突っ走る傾向があったため、あまり良くは思われていなかったが、この団体も存続が危ういもので、地元古くからの御曹司である彼くらいしか代表の適役が存在しなかったのが実状だそうだ。田舎の非営利団体はどこもそんな感じなのだろうか。
　死亡推定時刻は今日の正午頃。
　それはちょうど俺が例のカッパ淵で福島県須賀川産の胡瓜を川へ垂らし、今か今かと河童がくるのを待ち望んでいた頃である（女将さんが若干ひいていたことは内緒にしておこう）。
　流血が多かったので死因はバールのようなものによる打撲の出血かと思いきや、包丁による刺殺だそうである。
　死体は俺の部屋の隣で発見された。というか、我々が発見した。
　中から鍵が掛かっていたのである。この時間、中から鍵が掛かっていることは基本的にあり得ないため、女将さんがドアを蹴飛ばしたのである。開けてびっくり玉手箱、見知らぬおっさんが血塗れで横たわっていたとさ。
　死体の胸元から呼び出し状と思われる文書が見つかっている。新聞紙の文字を切り張りして作ったモノで、「お前のひみつをばらされたくなかったら１０月２１日正午に遠野屋旅館２０２号室へこい」と読める。犯人はこれを早渕氏のポストに投函し、奴をおびき寄せたところを殺害したのだろう。
　さてさて密室についてだが、旅館全体の合い鍵となるマスターキーは女将が常に携帯していた。部屋にはからくり屋敷のような抜け道の類は存在しない。せいぜい窓が開いている程度だったが、この狭い隙間では幼い子供か小動物じゃないと通れないだろう。それ以外に通路となりそうな場所はなかった。
　したがって、犯人は女将となるが、彼女にはアリバイがある。自分だけではなく、正午であればカッパ淵近くにある土産屋のおばちゃんがずっとこちらを眺めていたので、彼女に連絡を取って無実を証明したらしい。

　こうして、晴れてこの事件の容疑者はゼロ人となった。
　捜査陣は次々と以下のような見解を漏らした。犯人は窓をすり抜けることができそうな、遠野の河童である、と。

　　※　　※　　※

……馬鹿野郎っ！

※　※　※

俺は警察に対する罵詈雑言を思いっきり吐いた。
民間伝承原理主義なのか、この町は。
あまりにも馬鹿げている。何か、見逃している点があるはずである。
俺は頭を抱えていた。こんな曖昧な事件は初めてだった。手がかりもなにもない。ただ、目の前に密室という舞台設定があるだけだった。ミステリーの骨子だけを抜き出してきたような感覚である。
「こんばんは。お元気にしてましたか？　昨日は急にいなくなっちゃってすみませんでした今宵はしっかりお慕いします」
邪魔者登場である。
「結婚して下さい」
「それはお前の常套句か」
「ジョークでもトークでもないのです。こう見えても本気なんです」
だから、ジョートークだ！　俺はそう大声で叫ぶと、再びふてくされた。何だよ、ジョークだのトークだの。
「どうしたんですか？　いまいち表情がぱっとしませんよ」
こいつを窓の外に放り出してやろうと思っても、触れられないのだからしょうがない。まったく、こいつは俺を忙殺する気だろうか。俺のアイデンティティは一体何なんだ。ゆっくり寝ることも許されないのか。
「ジンギスカンラーメン食べましたか？」
「食べてない」
「あれこそ遠野名物ですよ。ジンギスカンラーメンの前では座敷わらしも河童もおしらさまもマヨイガも敵いません。あんなに美味しい物はないです。純然たる遠野名物なんです」
「食べ物には興味ない。腹が減らぬ」
「まあ、今度食べてみて下さいね」
会話が途切れる。合歓子は部屋の中央でくるくると音もなく回転し、気まずさを感じたのだろうか、合歓子は言葉を続けた。
「あたしと結婚して下さい」
「だが断る」
「接続詞が変です」
「お前の存在の方が変だ」
「変だから嫁失格なんですか？」
「うるさい。もっと複雑な事情があるんだ。それに今、俺はハイパーに忙しい。見りゃわかるだろう」
「わかりません」
頭が良いのか悪いのかわからない。

「この旅館で殺人事件が起こったんだ。俺はこう見えても探偵だ。捜査を行っている。邪魔するな」
　そう言いかけた瞬間、ふと彼女の姿が目に留まった。
　俺の眼球に緑色の罫線が引かれる。碁盤目状の目盛りが正体を表し、赤い服を身にまとった少女と重なる。フォーカスする。目盛りの値を読みとる。そしてその値と密室に唯一あった、例の抜け道、窓の隙間を照らし合わせてみる。サイズ照合は俺の予想通りの結果を露呈した。これは行けそうだった。
「ひょっとして、お前が犯人か？」
　合歓子ならば密室から脱出することが可能である。したがって、密室トリックは無に帰し、殺人が可能となるのだ。
「お前が、あいつを殺ったのか？」
「そう思います？」
　合歓子は俺の予想に反して微笑した。幽霊と名乗っているだけのことはあって幽艶な微笑みだった。
「何があったかよくわかりませんけど、私にはその犯行が根本的に不可能なのです。わかりますよね？」
　そういって、座敷わらしは指紋認証でもするかのように左手をかざした。
　俺の前には繊細な白い指先が提示された。爪はきれいなピンク色である。彼女が手を差し出すこと、そこに一体何の意味があるだろうか。
　その瞬間、俺は自分の愚かさを悟った。
「触れてみて下さい。この状態で、人が殺せると思いますか？」
　スピルバーグ監督による未知との遭遇を描いた有名な映画のごとく、手を重ね合わせようとしてみた。するりと、雲をつかむような感覚で自分の手は彼女を通り抜けていく。ＧＩＦ画像に透過処理を行ったようでもある。その体験は神秘的にすら思えた。彼女の前で俺の推理は無力に等しかった。
　そう、彼女はモノを掴むことができないのだろう。
「座敷わらしの中には石臼で米を搗き、箕でチリを払う音をさせるコメツキワラシのように、人間が使う物を操ることができるタイプもあると時々耳にします。しかし、少なくともあたしはその類ではありませんし、そのような仲間をどこかで見たこともないです。座敷わらしは人間界の思考上はいわゆる神なのだそうですが、神が直接人間界の物質を操作することはありません。人間界と霊界ではモノが違うんですよね。お互いに触ることはできないはずです」
「それじゃあ、どうやって歩行しているんだ？」
「浮遊する必要性を感じないだけです。ちょっとした念力は使えますから、人間が立てるような音をカモフラージュすることはできます。けれども、せいぜいお兄さんの筋肉痛を治癒する程度の力で、まとまったスカラーはありませんし、ナイフで人を刺すようなことはできません。せいぜい小石が数ミリ転がる程度ですね」
　なんだか語られてしまった。

　とうてい十二歳程度の女子が口にしないだろうという難語まで喋っている。
　座敷わらしだから成長しないだけで中身はババアなのだろうか。
　まあ、そんなことはどうでも良い。ともかくこいつは犯人ではなさそうだ。
「容疑者がいない……」
「河童はどうですか？」
　そういえばそんなことを警察が言っていた。奴らは真面目にやってんのかとあの時は訝しげに思ったが、考えてみれば座敷わらしを疑ってみた自分も警察連中と全く同類である。これは自分自身を大いに恥じるしかない。
「なんだか河童は座敷わらしと同じという説があるみたいですけどぉ、全然違いますよ。向こうは怪獣の類ですから物は触れるでしょうし、悪知恵も働きます。人間界にいる化け物なんですよ」
　こいつは河童を目の敵にしているのだろうか。
「河童は怪獣じゃないだろ。怪獣はあのエルトベーベンしか認めないぞ」
「何ですかその、なんとかベンベンって」
「猛獣”Erdbeben”。これを知らない奴はモグリだ。日本全国に限らず環太平洋火山帯全域に生息する巨大な怪獣だ。腹の上にある骨塊の先端についた大きなフリルと、目から三本の角がとさかと互い違いに延びているのが特徴なのだ。徳島県三好市で発見した四谷太郎と大塚花子の二人が公式に名前を付けた。地震のトリガーとなっている恐ろしい怪獣なんだぞ。こわいんだぞー」
　なぜか例のキョンシーのポーズを取っている自分に気が付いた。幽霊じゃねぇし。
　案の定合歓子は目を爛々と輝かせながら聞いていたが、あいにく大嘘である。元ネタが気になる人はドイツ語辞典でエルトベーベンを引いてみるといい。
「探偵稼業ってそういう仕事もやるんですか？」
「まあ、古今東西の謎を扱うからな」
　俺は得意になっていた。実のところオカルトおたくも兼ね備えたキャラクターで羽黒荘介は世間に知られている。ＵＦＯが見たいですとか、ＵＭＡを飼いたいですなどといった依頼も良く来る。
「それならなおさら河童の取材に行ってみるべきですよ。私、河童が良く出る場所知ってるんです」
「どこだ？」
　合歓子はニヤリとした。何かたくらんでいるようだ。
「教えたらデートしてくれますか？」
「だが断る」
「髪型が変です」
「整髪剤を家に置いてきたんだ。もっとも、そんなことはどうでも良い。コントやっている場合じゃないんだ。教えてくれ、後生だ」
「だから、デートしてください」
「そんな暇はない」

「えー。タダでは教えませんよ、お兄さま」
「金やろうか。福沢諭吉を数人生け贄に捧げてやる」
「座敷わらしが金を持っていても何にもなりませんよ。デートしてください」
　どうしようもない。他に妙案も思いつかなかった。事態は一刻を争っていた。
「わかった。お望み通りにするから教えてくれ」
　合歓子は諸手を挙げて喜んだ。その光景は玩具売場ではしゃぐ幼い少女そのものだった。喋らなければ本当に美少女である。
「ゆびきりげんまんしましょうよ、お兄さん」
「できないだろ」
「その場所で指を止めていて下さい」
「こうか」
「物理的に触れあうよりも、心が触れあうことの方がよっぽど大事なんです」
　そういうと、合歓子は小指を不器用に重ねてきた。だいたいこの辺りだろうと目測をつけて小指を揺らし、ゆびきりげんまんをやっているふりをした。彼女はニカっと太陽のように笑った。
　合歓子の台詞がなぜか胸に刺さってきた。痛みを伴う言葉だった。俺が長年忘れていた感覚だった。
　今まで物理的なつながりだけを求めてしまっていたのかもしれない。大人になっていく度に形式的なことばかりにこだわるようになってきた。何か目印ばかりを求めてきた。もっとこう、視野を広げなくては行けないのだろう。
　こんなんだからいつまでも理想の女性が見つからないんだ。
　人生で最初に告白されたのが中学生の頃で、あれは単なる子供同士の幼気なじゃれあいだった。そして二番目が今目の前にいる合歓子である。その間の期間、俺はずっと何をしていたんだろう。
　女性を一面的にしか捉えていなかったのだろう、きっと。
　合歓子が無垢に笑っている。こいつは少なからず俺に愛情を注いでいる。正体が何であれ、俺にとっては珍しい存在だった。全てが終わったらデートくらいしてもいいような気分になってきた。
　本当は、白状すると、幼気な彼女の仕草にほんの少しだけドキッとしてしまったのかもしれない。
　俺も結局のところオスである。合歓子が可愛らしいというのも普遍的事実だった。それは抗えない事実だった。
　一連の約束儀式が終わると、合歓子は授業参観における模範的な生徒のように発言しはじめた。
「カッパ淵は観光地化が進んで最早どの河童も棲んでいません。お兄さんがもしも河童の境遇ならば、遠野に伝わるお話にも、もっと上流に移り住んだと書いてあります。ただ、この辺りの近くで河童が集まっていると言われているのは多賀神社です」
　多賀神社といえば、俺がふと気になって迷い込んだ神社か。確かにあそこは何か出てきそうな

雰囲気があった。
「柳田国男の遠野物語拾遺百九十三話に多賀神社の話題があります。そこには狐が良く出て、買い物帰りの客を狙い、魚を盗んでいくそうです。それにしても狐が出ると言うことは、何かを隠していると思いませんか？　狐も河童も悪巧みするという点で仲良しのはずです。何か、河童にまつわる基地がそこにあるのだと思いますよ。正体は掴んでいませんが、私も何度かそこで河童を見ました」
　実に論理的である。この少女、相当頭は良い。
　どうやら行ってみるしかなさそうだ。河童が犯人でなくとも、何か手がかりはつかめるだろう。
　俺は合歓子に感謝を告げると、デートがどうのこうのとわめく彼女を後目に、ちゃんと行くから安心しろとだけ答えて、深い眠りに就いた。
「ああ、今から楽しみです。ねぇ、本当に連れって言って下さいね。約束したんですから。もう……」
　合歓子の声がデクレッシェンドしていった。或いはまどろみの中へ潜り込んで鼓膜が活動を停止したのかもしれない。
　さて、明日はどんな作戦で行こうか。

※　※　※

「作戦Ｂ」
　無線から無機質な声が流れてくる。俺はカロリーメイトのチョコレート味を食べながらその声を聞いていた。残り半分はあとに取っておこうと思い、ジャケットのポケットにしまい込んだ。
「了解しました」と俺は少し遅れて返事した。
「くれぐれもへまをしないように。最悪の場合、相手に逃げられても構わない」
「へまっていうのは逃げられるってことなんじゃないですか？」
「相変わらず仕事バカね。まったく、忙殺探偵の呼び名にふさわしいじゃないの」
「光栄です」
「命を落とすなってこと。わかる？」
　無線の向こうでボスが微笑しているのがわかった。ボスは容姿端麗で、今まで何人もの部下の鼻血をスパークさせてきた。最近は仕事のためか俺につきっきりで、俺はもっぱら同僚の殺意を集めている。
「作戦の完遂に向けて努力する次第です」
「あんたはこの期に及んで冗談しか言えないの？」
「俺としては、この期に及んで真実を言う人の気が知れないですけどね」
　ボスは冗談の通じる人である。無線の向こうでクスッと笑っていた。
「それじゃあ、よろしく」
「Yes, master」

プツっと無線は切れた。
胸元から愛用の推理手帳を取り出し、事件の経過を確認する。気になったことを暇な時にメモしているだけの手帳だが、昔からこの手帳を使ってきたので、恐らくこれがなければ満足な推理をすることができないだろう。もっとも、忘れたことがないのでなんとも言い難いが。
すっかり表紙は古くなって、紙もいい加減風化しそうである。別にたいしたことが書いてあるわけでもなく、別に敵に見られてもどうということはないのだが、たまに中を見て気持ちの整理を付けていた。忙殺探偵、つかの間の休息である。
手帳をいつもの胸ポケットにしまう。
さて、相手は攻めてくるだろうか。
どのような武器を持っているかすらわからない。そもそも武器を持っているかすらも怪しい。
ただ、かなり過激派だという事実は聞いていた。
若者達がデートに興じる横浜湾岸。ライトアップされた麗しきベイブリッジの麓。そこにはこれから輸出されていく自動車やコンテナ、その他大型鉄屑が犇めいている。そして日々不法入国者が蔭で暗躍しているという。このような現状を、横浜カップルはどれほど知っているだろうか。いや、デートに縁のない俺ですら知らなかったのだから無理もない。この間ボスに冗談でデートしませうと言ってみたら足蹴された。それでなんとなく満足してしまった自分がそこにはいた。
腕時計を見た。指定席を取った新幹線はとうの昔に行ってしまった。遠野昔に着いていたはずなんだけどなあ。……おやじギャグはよそう。後は釜石線の最終に間に合うかどうかだった。そんなことを考えて気を紛らわせた。事態はそれほど緊迫していた。
読者諸氏も一度は横浜駅から１０９系統のバスに乗って終点で降りてみると良い。憧憬の街、ＹＯＫＯＨＡＭＡも一皮剥けばこんなものである。
スタンガンの電源を確認する。バッテリは十分だ。後はモチベーションである。
車の陰に身を潜める。ゆっくりと歩を進めながら、周囲を徘徊する。
そこにあったのはバスの大群だった。三菱ふそう製の大型バス、ニューエアロシティである。日野製の中型ロングバス、レインボー（通称、日野もやし）まであった。これからどこかへ輸出されていくのだろう。それにしても夥しい数だった。これほどの数があれば密売でも何でもできる気がしてくる。
早速足音を聞いた。
身を屈めた。無線を一度オフにし、広域音声収拾装置に切り替えた。
雑音が鳴り響く。

ヴーーーーーーン。
ヴーーーーーーン。
ヴーーーーーーン。

ザザザザ……。

　ピッ。

「……イッヒビン、ショルンシュタインフェーガー」
　なにやら聞こえてきた。欧州っぽい言語と、東南アジア系の言語が聞こえる。果たしてどういう意味があるのだろうか
「ベルク」
「フルス」
　多分、合い言葉じゃないかと推測した。
　確実に距離は近い。俺は全身の神経を集中させつつ、周囲を徘徊した。
　再び無線のスイッチを入れる。
「ボス」
「なんだ」
「近いです」
「だろうな。がんばれ」
　ボスから激励の言葉を賜るのは珍しいことである。
　まあ、休暇のはずだった俺を突如呼び出してこんなに危険な任務をさせているのだから、当然と言えば当然か。
　俺は休暇を取るんだと反論したものの、あんたは忙殺探偵でしょうと反論された。返す言葉もなかったんだ。
「今回の報酬は弾んで下さいよ」
　ダメ元で言ってみた。
「わかっている。しかし、お前が金に執着する男だとは思わなかったな」
「探偵は犯人の気持ちに立って捜査しないと動機がわかりません。嫌でも金が好きにならないと、たった今の捜査事態がバカらしくてやっていられなくなります」
「お前のそういうところが好きだ」
　やはり冗談でボスには敵わない、か。
　目測を付けて歩み寄った。
　冷たい風が海へ向かって吹いていく。
　なるべく音を漏らさないよう、忍び足で行く。
　談笑が聞こえてくる程度の距離まで追いつめた。
　前提条件から考えよう。
　こんな場所で、日本語ではない言語を用いた人が集まっているはずがない。
　貿易会社だったらここにいても何らおかしくはないが、奴らは完全に外国人だ。
　そして、売買しているのはおそらく麻薬である。
　麻薬関連五法はざっと以下の通りだ。

　　・麻薬及び向精神薬取締法

・あへん法
・大麻取締法
・覚せい剤取締法
・国際的な協力の下に規制薬物に係る不正行為を助長する行為等の防止を図るための麻薬及び向精神薬取締法等の特例等に関する法律（麻薬特例法）

確かこんなもんだった気がする。最後の法律などは名前が長すぎておそらく麻薬でもやっていないと覚えられないが、あへん法などは一見可愛らしい。
もっともそんなことはどうでも良い。法律に関しては捕まえてから考えよう。
バスの前の方に身を屈め、窓ごしに相手の様子を伺うことにした。三菱ニューエアロスターには前方確認用に小さな小窓がある。これを利用しない手はない。
巨漢とノッポだった。一人は目の前で大型のマトリョーシカをちらつかせている。他方は懐から封筒を出し、ノッポに手渡した。ノッポは封筒の中身を確認すると、マトリョーシカを巨漢に手渡した。
巨漢はマトリョーシカを逆さまにし、胴体からぱかっと分けた。
そこには白い粉がわんさか詰まっていた。
男の表情がふやけた。こいつは既にラリっている。
おそらく、巨漢の方は武器を有していない。
俺の推理はそうだった。
ノッポはアタッシュケースを開き、次々とマトリョーシカを巨漢へ渡していくようだった。さっと一旦その場を離れ、ノッポの背後へ回った。
ふっと、気づかれないようにため息をする。
ノッポこそ要注意人物だろう。こいつは何を持っているかわからない。取引中、もはや涎を垂らさんばかりだった巨漢に比べ、こいつは至極クールである。もはやヤク中となってしまった巨漢に対して、良質の麻薬を法外な金額で売りつけているに違いない。
ノッポに近寄っていった。
ふと、強風が吹いていった。
ノッポの山高帽がとばされる。
一瞬、こちらを見たような気がした。俺はおもわずびくっとした。
しかし、何事もなかったかのように帽子を拾うと、そのまま取引を続行した。
麻薬の方も問題なかったようだ。
大丈夫、まだ気づかれていない。
ゆっくりと、確実に。
俺はスタンガンを取り出した。
ノッポはおしゃれな格好をしている。
青い短めのネクタイに明るい灰色のスーツを羽織っている。格好だけはイタリアマフィアといった感じだろうか。

狙う場所は首筋がいいだろう。
ショック死はしないように作られている。一瞬意識を失うが、電流自体は大したことがないので、身体に悪影響をもたらすことはない。優秀なスタンガンだ。ボスから授かったので機種とかメーカーとか詳しいことは知らない。アキバにある、変なアナウンスで有名な店で買ってきたらしい。
ノッポに一撃を喰らわせた後、うろたえる巨漢を捕らえ、結果をボスに報告さえすればよい。そうすれば援軍がわんさかやってくるだろう。
麻薬の売買という事実確認が俺の仕事だった。だから、俺の仕事はもはや終わったのも同然だった。
けれども、目の前で犯人が暗躍しているのに、放っておくにはいかない。
その程度の義侠心くらい持っているつもりだ。
巨漢に気づかれないようにするのも重要だった。
大丈夫、巨漢はマトリョーシカの美貌に酔いしれている。人間がたかが粉に対してあれほど偏狂的になれるのもすごい話である。
俺がスタンガンを奴の首筋に延ばそうとした瞬間。
自分自身が油断していたことに気が付いた。
けれども、もう遅かった。

※　※　※

嫌な夢を見たようだった。
遠野の天気は相変わらず芳しくない。部屋の中にまで曇天が入ってきているようだった。
まだ早朝のようだ。朝日が変に反射して、空は紫色に染まっている。遠くの方を見ると一部雲が晴れている場所があり、オレンジと紫のグラデーションができていた。神秘的な光景であるが、晴れではないことは事実だった。そういうことである。
気分も晴れなかった。よく考えてみれば、昨日隣りの部屋で殺人が起こったのである。そりゃ、いい気分になれるはずがない。
犯人は果たして河童なのだろうか。
自分の部屋を見回してみた。構造はだいたい隣の部屋と同じだった。幾分こちらの方が広いといったところだろうか。
確かに、脱出方法は窓からしかあり得ない気がする。鍵が使えない以上、どうにもならなかった。
かつての推理小説に、クレーンのようなもので屋根自体を持ち上げ、それで脱出するというものがあった。再び屋根を被せれば証拠隠滅というもの。しかしこの旅館は三階建てであり、二階部分で行った犯罪だからそれは不可能だった。それに、この遠野にそれほど大きいクレーン車はない。
これは探偵人生初めて以来の難事件かもしれない。通常の事件と異なるのはディーテールが多

すぎるのではなく、極端に少なすぎると言う点である。確かに、警察が物の怪のせいにしたがるのも無理はないかもしれない。
「お兄さん、起きて下さい。爽やかな朝ですよ」
　合歓子の奴が声を掛けてきた。全然爽やかじゃない。
「寝ている間にうなされていましたよ。大丈夫ですか？」
「お前が呪ったんじゃないだろうな？」
「そんなことしませんよ」
「そうでなくともプライバシーの侵害だ」
「でも、顔色が悪いのを放っておけないですよ」
　合歓子は自分の手を俺の額に当てた。もちろん、当たるはずはないのだが。
「熱はなさそうですね」
「なぜわかる」
「ごめんなさい、嘘です。こんな時には触（さわ）れたらなと思うんですけど」
「俺は大丈夫だ。気にするなって。そういえばどうして朝に出現しているんだ」
「今日は日曜日だから大丈夫なんですよ」
　こいつはお化けの学校にでも通っているのだろうか。
　しかし、よく考えてみれば座敷わらしが夜にだけ出現するという確証はどこにもなかった。別に夜行性でもなんでもないはずである。油断していたのは俺の方だった。
「お兄さんは将来的に私のお嫁さんになる人なんですから、ここで体調を崩されたら困るんですよ」
「それを言うならお婿だろ」
　俺がそう言うと、合歓子は確信犯的な笑みを浮かべた。どうやら俺は根本的なところを訂正することを忘れていたらしい。
「もっとも、結婚はしないけどな」
　えーっ、と顔を歪める合歓子ちゃん。
「とりあえず俺は死ぬほど忙しいんだ。まずはこの事件を解決する。次に東京へ帰って麻薬売買の事件にケリをつける。その後も目白押しなんだ。仮にだ。万が一、お前と結婚するようなことがあったとしても、お前と喋っている暇はないだろう。だから、むやみに俺と仲良くしないほうがいい」
　俺の発言に合歓子は珍しくシュンとしてしまったようだ。
　少し、虐めすぎただろうか。
　様子を伺うと本気で落ち込んでいるようである。何か声を掛けてあげれば良かったのだろうけれども、特に良いアイデアも冗談も思いつかなかった。
　俺は無言で部屋を後にした。合歓子はおそらくついてこないだろう。
　俺は心の平静を保っているだろうか。少し怒鳴り散らしすぎただろうか。いや、俺が忙しくて合歓子とつきあっている余裕はないというのは残念ながら事実なので、しょうがないことだった。

　そう、胸に言い聞かせた。
　……胸。
　そうだ、推理手帳に事件の整理をしよう。
　そろそろ頭が混乱してくる頃である。事件の概要をまとめておいた方がいい。
　そう考えて、俺は胸ポケットから例の推理手帳を取り出そうとした。
　しかし、そこにあるはずの物はなかった。
「あれ？　手帳がない……」
　思わず独り言を零してしまう。
　どこかで落としただろうか。これはまずいな……。
　寝ている間に合歓子がいたずらして盗んだだろうか。その可能性は大いにあり得る。
　振り返り、彼女を詮索しようかと思ったが、こうして落ち込ませてしまった以上、なんとなく気が進まなかった。まあ、別に今聞くことはない。どうしても見つからなかったら彼女にも聞いてみよう。どうせまた出てくるに違いない。
　階段を降りていく。ふわふわ浮いている気分。なんだかやるせない気がしてならない。もっと心を落ち着けるために遠野へ来たのに、これじゃあいつもと同じである。
　ストレスが溜まっているのだろうか。ストレスを溜める余裕すら俺にはないんだと自分には言い聞かせてきたつもりだったし、それで今まではうまくやってきたのだが、だんだんうまくいかなくなってくる。
　もうそろそろ、年なのかもしれない。
　一階に到着。女将さんがせっせと朝食を運んでいる。この人みたいに頑張らなきゃだめなんだろうな、俺。
「おはようございます。なんだか騒々しくなっちゃってすみませんね」
「いやこっちこそ。多分、事件を引き寄せるのは探偵の方ですから」
「はぁ」
　女将さんは不思議な表情を浮かべた。
「そういうもんなんです。探偵の行くところに事件は起こるんです。迷惑掛けちゃって本当にすみません」
「そういうメタ次元での話はやめてくださいよ。お客様が真面目そうに言うとついつい真実に聞こえちゃうじゃないですか」
「冗談を言うタイミングが下手なんです。俺は元から口下手なんです」
「まあ、元気出して下さいよ。お客様が悪いということはあるわけないんですから」
　まあ、それはそれで正論だった。
「今日も捜査ですか？」
「ええ。河童たちについても含めて」
「そうですか。あまり無理はしないで下さいね」
　そのまま去ろうとした。しかし、どうせなら気になっていた質問をぶつけてみた。
　今回の事件は計画的な犯行である。新聞を切り抜いた手紙を用いて呼び出しまで行っていた

のだ。
　仮に犯人が河童だったとしよう。彼らはそんな物を作れるだろうか。
「あの、河童って日本語の読み書きできますか？」
　突拍子もない俺の質問に女将さんは首をひねった。
「うーん、その質問をされたのは初めてですね……どうなんでしょう？」
「日本って比較的前近代から識字率が異常に高かったんですよね。農村で働く労働者でさえ、村に張り出されている御触書を読めたくらいでしたから。民間伝承で伝わっている河童たちも、あるいは読めたんじゃないでしょうかね？」
「その可能性は高いと思います。彼らは知能が高いですからね。まあ、私は会ったことがないのでなんとも言えませんが……」
　やはり地元の人でもそう考えるか。
　捜査してみるしかない。
　長年探偵を続けてきた俺だが、人外に捜査が及ぶのは今回の事件が初めてのことだった。
「最後に一つだけいいですか？」
「はい、なんでしょう？」
「俺の……手帳見ませんでしたか？　どこかで無くしちゃって」
「どんな手帳ですか？」
「茶色っぽくて古い奴です。相当年季が入っているので、見ればわかると思います」
「残念ながら見てないですね……まあ、旅館のどこかで見つけたらお知らせしますよ」
「あ、それじゃあお願いします」
　俺は女将さんに別れを告げると、遠野屋旅館からそそくさと出ていった。
　目指すは河童との巡り会いである。
　それが犯人であるかどうかにかかわらず。

第三章「マヨイガ、狐、河童」

　通常営業しているのかどうか端から見ただけではわからない遠野行政センター庁舎の角を曲がると、鬱蒼とした草木で生い茂った山肌が突然姿を表す。初日に見た木々の群の正体はこれだった。
　手入れのなされていない雑然とした場所で、日本全国古今東西の雑草が凝縮されているようだった。俺は自分の部屋にある枯れかけた観葉植物に似た葉っぱを見つけ、水やりを忘れていたことを思い出した。あいつはまだ生きているだろうか。
　まあ、それはさておき、昨日合歓子が言ってくれた多賀神社だ。
　「多賀神社」「山神」とそれぞれ書かれた巨石が神社の目印だった。さながら大地から屹立し、先端より半分に割れたアレのようである。鳥居にも苔が蒸して、か細い注連縄が一本垂れ下がっているだけだった。同じく苔だらけの階段の行き着く先は針葉樹の密林である。
　足取りがおぼつかなくなる。雨上がりのじめじめとした空気を吸いながら、俺は一歩ずつ足下を確かめながら苔の階段をあがっていた。
　全く、あの手帳はどこへ行ってしまったのだろう。探偵稼業を始めて以来、あの手帳を手放したのは今回が初めてだった。それは身体の一部であるがごとく、いつも身近な場所にあったので、特にこれといって常時携帯する注意を払わなかったのである。しかし、俺はその手帳をどこかへ放り投げた記憶もなければ、自分の身から離したこともない。実に不可解なことである。
　果たして、殺人事件と何らかの関係があるだろうか。正直、あの手帳がなければ事件が解けるかどうかわからない。どうにかなるだろうか。
　禅問答を脳内で繰り広げつつ、俺は前へ上へと進んでいった。わりと長い階段である。
　両側には枝をもがれた杉の木、うち捨てられた照明器具が等間隔というわけでもなくぐだぐだに並んでいた。右側の照明器具には赤い祠のようなちっちゃいカバーが被されているものの、中のガラスは無惨に割れている。
　左側の照明は祠のあった形跡が残るのみで、白熱電球と電気コードがごちゃごちゃに絡まったまま夜露に濡れていた。杉の木にもコードが掛けられているが、ここに電気の通った面影を見いだすことはできなかった。電気コードはむしろ自然に蝕まれていた。せいぜい、狐のおもちゃになっているのかもしれない。
　果たして河童は出てくるだろうか。
　雰囲気は十分な気がする。あとは向こうが俺のことを歓迎してくれるかどうかだ。
　期待してみたい。
　やがてひらけた場所に出る。杉の大木が俺を見下ろしている。葉緑体の色を一層際だたせる曇天が木々の隙間から垣間見え、森は静寂を保ったままだった。二日前に来た場所のはずなのに、視界は新鮮だった。むしろ遠い子供時代の記憶と、どこかで繋がっているような感慨を起こさせた。
　階段をさらに登っていく。天から裸電球がぶら下がっている。地面はぬめぬめしていた。しばらく立っていると自分にまで苔が蒸してしまいそうだった。降り注ぐ黒い光と足下の緑の狭間で

俺は長い間彷徨っていた。しばらく行くと赤い柱に真っ白な壁の神社施設が見えてきた。倉庫か何かだろうか。正体はわからない。
　見知らぬ円光だった。建物が恒星のように輝いている。
「これは一体何なんだろう」
　思わず独り言が漏れる。今までさまざまな神社を見てきたが、これほどまでに神々しく輝いている場所はなかった。周囲は荒れ果てていて神社自体が打ち捨てられている様子なのに、どうしてここまでの威光を秘めているのだろうか。
　そう、俺の目は空間を捉えてしまった。
　そして好奇心の赴くがまま、吸い込まれるように壁の中へ埋没していった。
「えっ……」
　何が起こったかわからなかった。
「嘘だろ？」
　嬌声を聞く者はいなかった。俺の体はもう神社の中へ入っていった。
　助けを求める余裕もなかった。求めたところで、こんな辺鄙な地では誰も助けにきてくれないだろうけど。
　一体何が起きているのだろうか。
　さっぱり解せなかった。
　それでも、俺の身体はみるみるうちに神社内へ移っていったのである。
　ちょっと待ってくれ。
　いきなりこんな現象が起こるなんて。
　遠野物語にもこんなことは記載されていなかったぞ。
　どうなっているんだ。
　疑問も虚しく潰えた。
　全ては文字通りに行われた。暗い世界に身を投じたかと思うと、快い打撃音とともに、急激に意識が失われていった。
　視界は渦巻き、やがて真っ白な光に包まれたかと思うと、突然闇の中をさまよっているのだった。

　……。

　……。

　　※　　※　　※

　自分の置かれた状況が解せなかった。
　自分はよくわからない神社施設の前へ来て、その建物がよくわからない光に満ちているように思われたから、すっと手を伸ばしただけである。まさにトンネル効果。俺の身体は分子と分子の

狭間をすり抜けて、神社施設の壁を無価値にせしめた。
　トンネル効果というのは稀にミステリーで用いられる小ネタである。人間も壁も分子の集まりである以上、天文学的な数字分の一の確立で人間は壁を通り抜けてしまうことが可能なのである。しかし、それはそうそう起こるものではない。俺も今まで探偵家業を続けてきたが、これを用いたトリックはついぞ出くわさなかった。フィクションの世界だけの話である。そんな確率で起こるわけがない。
　一体どうなっているのだろうか。
　これは奇跡か何かだろうか。
　周囲を見回してもさきほど俺が中へ入った神社施設らしくない。長いトンネルの中といった様子だった。じめじめとした肌寒い空間で、遠い先にトンネルの出口らしき光が一筋見える以外、全ての夜をも凌駕する真っ暗闇に包まれていた。
　俺は身を起こした。今まで横になって倒れていた事実に気づいた。痛みはない。少し目眩がする程度である。まだ歩ける。
　暗がりの中をどれだけ歩いたことだろうか。出口の光は朝日が昇る程度の早さでルクスを増していった。
　遠野にはマヨイガという概念がある。山奥に迷い込んだ者は、そこで一件の豪邸を発見した。屋敷の中は時間が止まってしまったかのように誰もおらず、暖炉の火などもそのままだった。彼はしばし休憩を取り、再出発した。それからというものの、何度も何度もその場所へ戻って例の屋敷を探そうとしても見つからなかったという。
　俺はまさにそんな世界へ迷い込んでしまったようだった。
　遠野自体がそんな町かもしれない。今度はいつこられるかわからないが、また釜石線に乗ってこの地を踏んだとき、新たな遠野を見いだすのだろう。
「……ぐすん」
　なんだか声が聞こえてきた。一瞬合歓子かなと思ったが、どうやら違うようである。
「あ……」
　そこに蹲っていたのは小さい狐だった。オスには見えなかった。なんだか怯えている様子である。
　黄金色の毛はふわふわしていて気持ちよさそうだ。ただ、身体を震わせていたから、きっと寒いのだろう。
「あのぅ……どうして、ここへ来たんですか？」
　蚊のなくような声で狐は質問してきた。そいつはまだ幼いようで、声も驚きのためか震えていた。本当に驚きたいのはこっちの方だ。
「ある人からこっちの方に河童がいると聞いてね」
「それならぁ、このトンネルを抜ければたくさんいますよ」
　狐は身を萎縮させながら答えた。そいつは狐の固定観念を覆さんばかりの円らな瞳を輝かせていた。思わず、俺が足を止めてしまうくらいの可愛らしさだった。
「あんたは、ここで何をしているの？」

俺が質問すると、狐は戸惑ったようだった。
ステレオタイプの狐像と言えば、卑怯でずるがしこく、人間にしょっちゅういたずらをふっかけるというものであろう。遠野にもそんな悪戯狐の伝承は数多く残っている。
たとえばイソップ物語に狐と鶴のごちそうという物語がある。内容自体はご存知の通りだろう。海外ですら狐は意地悪な動物として描かれているが、遠野の昔話にこれと少しだけ似ている話がある。それは狐とカワウソという物語だった。
狐がカワウソを食事へ招待したが、容器の都合上カワウソは何も食べることができなかった。そこでカワウソは復讐のため、狐にちょっとした耳より情報を教える。それは、川に自分のしっぽを垂らし、魚を捕まえる方法だった。
狐はまんまとカワウソの話を信じ、寒い冬の晩、川へ出かけていった。狐が川に自分のしっぽを垂らすとその辺りから川は凍り始めた。狐は魚がついたのだと勘違いし、欲張りだったのでもっと魚がひっつくようしばらく尻尾を垂らしたままにしていた。長時間後、ようやく狐は水が凍っているだけだと気づいたが時すでに遅し、翌朝村人に発見されて懲らしめられるのでした、というお話。
このように、狐は勧善懲悪物語の悪役に仕立てられることが多い、欲深い動物像として描かれがちである。しかし、対照的に狐の忠誠心、義理深い性格を示す民間伝承も存在した。狐の恩返しといったタイトルで、題名通りの内容がある物語が遠野にはある。狐が聖なる動物として稲荷神社などの守り神になっているのは有名な話だ。
そして、俺の前で小さい狐はぐぅと腹の虫を鳴かせた。
「ひょっとして腹減ってるの？」
狐は羞恥で顔を真っ赤にした。図星だったようだ。
「何かあるかな？」
俺は自分のジャケットをまさぐってみた。
なぜかカロリーメイトのチョコレート味が入っていた。ああ、あれか。横浜で犯人を追っていた時に食べてた奴。まだ食べてなかったのか、俺。
こんなの食べるだろうか。
うん、物は試しだ。
俺もずいぶん丸くなったものだ。
「これ、食べるかい？」
カロリーメイトの包装を破り、中の黒い棒を差し出した。狐は最初、不思議そうな表情を浮かべていたが、腹の虫を聞かれたくらいだからいっそのこと食べてしまえと言わんばかりに、むさぼるようにカロリーメイトを平らげた。
あっと言う間だった。
「美味かった？」
「はい、とてつもなく」
そこはかとなく意味不明である。カロリーメイトなんてそんなに味を意識した食べるもんじゃないのに。

「ごめんなさい、私なんかのために……」
　何を謝っているのだろうか。
　そもそも、こいつはどうしてこんな所にいるのだろうか。
　俺は興味本位で尋ねてみた。
「君はどうしてここにいるんだ？」
「私は神社の守り神なんです」
　これはまた随分と貧弱そうな守り神だ。口元にカロリーメイトの茶色い滓が付着したままである。
「さっきのところの多賀神社か？」
「えっと、厳密に言うと違うんです……」
　なんだか申し訳なさそうに謝られた。こっちが困る。
「多賀神社は、えーっと、イザナキさんとイザナミさんが祀られているんですけど、なんだか忙しいみたいで、もうなかなか顔を出さなくなっちゃったんです」
　御祭神が忙しいのか。なんか俺みたいだな。
　イザナキ、イザナミはご存知のとおり、日本列島を形成した土着神である。あの二神が巨大な柱の回りをぐるぐる回ってくっついて、日本を生み出したという神話はあまりにも有名だ。
「私は元々、隣にある稲荷社を管轄しているだけだったんですけど、本殿の方がめっぽう寂しいので……」
「本殿の方も見るようになったのか」
　御利益あるのか？
「最近は参拝客も滅多に来ないんです。まあ、小さい神社だから仕方ないんですけどね。なんだか、狐がいたずらするという噂が広まっちゃって、村人たちも寄りつかなくなっちゃって……」
　狐はほとんど泣きだす寸前だった。いろいろ辛い過去があり、今があり、じっと我慢して空腹を凌いでいたのだろう。泣けるぜ。神様といえども不景気の波には抗えない。どこもかしこも大変である。
　合歓子もこのくらい謙虚なら考えてやってもいいのに。
　いや、根本的に不可能か。考えをただす。
「いずれにせよ、この恩はいつか返させていただきます」
　狐は深々と頭を下げた。
　なんかいいことあるのだろうか。
　まあ、神様としての力もアレみたいだし、あまり期待せず気長に待つとしよう。
「これからどちらへ向かわれるんですか？」
「河童ランドがこの辺りにあると聞いたんだが」
「ここは多賀神社の拝殿から河童達の村へ続く通路なんです。簡単に通すなとイザナミさんには言われていたんですけど、もうここには来ないと思うので大丈夫だと思います」
　意外と寛容なんだ。というか、イザナミって……。

「イザナミさんは恐いです」
　聞いてねぇし。人類の母ちゃんを鬼婆呼ばわりするな。
　そして、なんか震えている。なんかトラウマでもあったのだろうか。まあ、深く詮索するのはよそう。
「それで、河童ヴィレッジへ行くにはどうすればいいんだ？」
　名称がどんどん変化していく。やがてはカッパコスモポリスになるのだろうか。
「あ、ごめんなさい」
　肝心なこと言ってなかったですね、と小声で囁く。
「そのままトンネルを直進してください。それだけです」
　別に狐に聞く必要はなかったようだ。まあでも、これで合歓子の噂が確信に変わったというものだ。感謝しなければならないだろう。
「それじゃあ、気をつけて行って来て下さいね」
「ああ」
　俺は狐に手を振ると、狐につままれたような気分でトンネルを歩いていった。

※　※　※

　長いトンネルを抜けるとそこは河童の楽園だった。
　断じてどこぞの健康ランドではない。ちょろちょろと流れる小川のほとりに赤い顔をした河童たちが住んでいたのである。そう、遠野の河童は赤いのだ。
　森の小さなオアシスといった様子だった。河童たちが作り上げた自然との共生手段。太古の昔、旧石器時代における人間の営みにも似た様子である。地球温暖化防止のためには人類がこのような生活に戻らなければならないと常日頃から主張してきた俺だが、どだい人間には無理なようだった。しかし、河童は俺たち人間よりも知性があるにもかかわらず、いや知性があるからこそ、このような生活を営んでいるようだった。
　河童たちとはすぐに打ち解けた。羽黒荘介だと自己紹介したら何かを理解したようだった。すぐさま広場の泉のそばで歓迎の宴会が執り行われ、遠くから来た俺を丁重にもてなしてくれた。芥川龍之介の某作品のように共産主義的談義になることもなかった。楽しい時間が過ぎていった。俺の夢がついに叶ったのである。
「こいつが河太郎、その隣が河二郎、そのまた隣が河三郎です。んでもってあっしが河五郎です」
　どう違うんだよ。
　自己紹介されたがまったく区別がつかなかった。俺はただ頭を下げて自分の名を名乗るだけだった。
「あなたのことはご存知ですよ」と河童の河二郎。「ようこそお越しくださいました」
　聞きたいことは山ほどあった。なんでこいつらが俺の素性を知っているのか、など。しかし、どうやら俺の河童に対する研究心のほうが勝ったようだった。

「普段はどのように過ごしているんですか」と俺は尋ねてみた。
「ここ数十年はここでひっそり暮らしてますよ。もう世間に姿を表すことはないでしょうね。昔は散々暴れ回ったものですけどね」
「岩泉町の家に侵入して座敷わらしを装って飲み食いしたら、まんまと捕まっちまってさ、詫び状書かされたぞ」
　高齢そうな河童はそう語っていた。河童と座敷わらしをいっしょくたにする誤った説はここから生まれてしまったのだろう。いろんな学説があるようだったが、やはり両者は別物である。聞いてみるもんだ。
「もうあっちには行けねぇな。遠野も良い町なんだが、最近ごちゃごちゃしてしょうがねぇ」
「んだんだ」
　河童たちが東京に来たら大変なことになるだろう。渋谷のスクランブル交差点を見ただけで卒倒してしまいそうだ。俺のかあちゃんも同じだったからな。一度東京に招待し、すっかり体を悪くしてからは呼んでいない。ああ、母ちゃん。今は何をやっているのだろうか。
　いやいや、気を取り直そう。河童の話である。
「昔は良かったんだけどもな。今じゃあ何かと観光客がばだばだいてね、バスで大勢やってきては排気ガスだけ残して帰っていく。遠野の人間も大変じゃろう」
　特にＮＨＫの連続テレビドラマで遠野が取り上げられた時の混雑は凄まじいものだったらしい。語り部のおばちゃんはトイレへ行く暇もなく昔話をしゃべり続け、マナーの悪い観光客は散々遠野を荒らして帰っていった。
「もっとも、今はどこも不景気でさあ。遠野という寒村が生き残っていくためには観光客を呼ばないと仕方ねぇんだよな」
「その通りなんですよ。生き残りって本当に難しくて、色々大変なんですよね」
「もうちょっと穏便な方法がねぇかなと思うこともあるんだけどな」
「もっとも、オラたちの出る幕はねぇ。人間界における河童の認識はもはやマスコットキャラクターだ。たった今流行している「ゆるキャラ」と同義なんだ。オラたちが町へ出ていった瞬間、人々は混乱するだろうな」
　河童の言うとおりだった。
　そして、俺は自分自身を省みた。
　俺も単なる観光客である。カッパ淵で胡瓜を垂らしながら心待ちにするという愚行があったばかりだ。
　恥ずべきことである。
　自分もまた、外部の一人である。せいぜい四日も過ぎれば再び遠野から離れ、日常生活に戻っていく。河童は好きであるが、オカルトマニアと等しく、非常におたく的な趣味であり、彼らのことをここまで考えていなかった。
　俺が黙っていたのを察してか、俺の隣にいた河童は優しく声を掛けた。
「大丈夫ですよ、あなたは他の人間と違いますよ」
「どうしてそんなことが言える」

「あなたは『まれびと』だからです」
　そんなことを言われてもねぇ。確かにあの旅館でも言われたけど、実感はまるでない。ただ東京からやってきたしがない探偵である。
「あなたは多賀神社の壁をすり抜け、ここまでやってきました。通常の人間にできる芸当ではありません」
「んだんだ」
「久々に物わかりの良い奴に巡り会えて嬉しいよ、おいらは」
　河童は次々に言葉を投げかけてくれた。
　これほどの優しさに包まれるのは久しぶりである。専門の探偵学校を首席で卒業し、ずっと探偵としてのエリート街道を歩んできたこの俺だったが、今まで人が死ぬ現場や、犯罪の現場ばかりで人生を送ってきた。ほっと一息つける時間は皆無だった。本当に遠野へ来て良かったと思っている。
「向こうの世界から狐以外の奴が来たのは久しぶりだよな。以前人間が来たのは五年くらい前か？」
　ここに人間が来たことあるんだ。まあ、それもそうか。
　異界に迷い込んでしまう人間というのはたまにいる。
「そうだな。あいつも宴会に誘ったんだけど、自分は臆面だからとしきりに断って、俺たちの様子をじっと見ていたっけな」
「オクメンだからって？」と俺は尋ねる。
　臆面？　一体なんなんだろう。
「ああ、自分は臆面だって言ってた。よく意味はわからんけどな。シャイなんだろう。寡黙な感じだったし」
「俺はそうは見えなかったけどな」
「そうかい？」
「そうだ。まあ、そんなことはどうでもいい。お前は最高だ。飲めや飲めや！」
　少々気になったが、回りの雰囲気に気圧されて話はスルーされていった。
　宴もたけなわ。河童たちは酒を飲みながら次々と豪華絢爛な胡瓜料理を口に運んでいった。どれもこれも胡瓜だったが非常に美味であった。人間世界ではひどい評判だったペプシコーラのキューカンバー味まである。これだけはいただけなかった。
　空にはうっすらとピンク色の雲がかかり、鬱蒼と茂る広葉樹の森はなかなか日本では見かけないタイプのものだった。河童たちはこの狭い集落に藁でできた小さな小屋を立て、拡大家族で住んでいるという。
　果たしてここは遠野と隔離された場所なのだろうか。いや、それは違うはずである。ここも遠野の一部だ。地図に載っていないだけで、地球上には存在しているはずである。地図は円形の地球をわざと平たくしたものであり、必ずしも正しいわけではない。どこかに盲点となる場所はあるはずである。
　ここに河童たちは自らの楽園を見いだす。人間が跋扈し、観光客が地図を片手に騒々しく往来す

る中心部から離れ、人目に付かぬようひっそりと河童たちは生きている。
　今、子供の河童が小屋から出てきて、母親河童に抱きついた。母親は優しく解放してやると、子供は諸手を挙げて喜んで、その場をぐるぐると回りながら飛び跳ねて喜びを表現していた。合歓子によく似ていた。
　ふと、合歓子の笑顔が脳裏をよぎった。

　ねぇ、一緒に遊びましょうよ。

※　※　※

　それからというもの、俺は河童と飲み食いし、高らかに笑い、酔っぱらった勢いでよくわからない阿波踊りのような踊りを行った。トーテムポールの回りを河童連中とともにぐるぐる回った。楽しかった。河童はとてもフレンドリーな奴らだった。調子に乗って俺は河童と手を取り、社交ダンスのまねごとみたいなことをした。至極気に入られたようだった。俺は自分が忙殺探偵と呼ばれているくらい忙しいことをすっかり忘れてはしゃいでいた。
　踊り疲れると、再び広場で円になった。談笑を続けた。遠野に伝わる民間伝承の真意とか、実にいろんなことを教えてくれた。
　俺は至極幸せだった。できることならずっとここにいて、河童たちと余生を過ごしたかった。
　しかし、それも無理なことだった。しょせん、俺は河童ではなかった。
　自分がどうしてここにやってきたのかを思い出す。例の殺人事件の捜査である。
「人間界の情報はこちらに届きますか？」と俺は尋ねてみた。「ちょうど今、遠野でちょっとした問題が起こっているんですけど」
「ああ、早渕が殺された事件な」
「詳しいですな」
「こう見えても日経新聞は毎朝読んでいる」
　河童は得意気に語った。どおりで俺のことを知っていたのか。俺は名探偵としてマスコミには引っ張りだこだからな。日本国憲法は彼らに選挙権と被選挙権を与えるべきだと思う、切実に。
　それにしても、新聞を読んでいるのか。
　あの犯行予告の手紙が気になった。早渕を脅し、遠野屋旅館へ来るようにし向けたあれである。使われているのはなんとなく読売新聞っぽかったけど。
　とにかく、河童も知能的には犯行が可能である。
　水掻きで鋏が使えるかという疑問はまだ残ったままだったが、ひとまず捜査が一歩前進したといえそうだ。
「早渕の行動は前からおかしかったよな」
「そうですねぇ」と河童はため息しながら言う。「敵が遠野の地にどれだけいるか、わかりません」

「殺された早渕は何かやらかしたんですか？」と俺。
「あいつは遠野にテーマパークを作ろうとしたんだ。幕張にあるアレみたいな」
……馬鹿だろ。
このゆったりとした土地に、これ以上何を望むというのか。
これは怒りを通り越して、呆れるしかなかった。
しかし、住民や河童たちにしてみればたまったものじゃないだろう。
誰かしら、反旗を翻す者がいてもおかしくはない。
「早渕のやつ、用地買収に難航していたが計画は必ず実行すると言い張っていた。もはや誰にも止められなかった。こんな土地にレジャー施設作ったって、そりゃあ最初の数週間は繁盛するだろうけど、杜撰にもほどがあるがな」
「それ以前の問題だ。神様がいらっしゃるこの村に遊ぶ施設だなんてとんでもねぇ」
「そうですよね。だから、早渕を嫌っている人は相当いたはずですよ」
俺はふと、かねてからの質問を投げかけてしまった。
「早渕を嫌っている河童もいましたか？」
一瞬、場が凍り付いた。
さすがにまずかっただろうか。
河童たちはこちらを睨み、それから互いを見合わせた。俺の真意を悟ったのだろう。ひょっとしたら河童が彼を殺したんじゃないかという一つの推理を。
「そりゃ全員早渕のことは嫌ってますけど、人間界まで行って人殺しをしようとは思いませんよ」
青年の生き生きとした河童が答えていた。その目から何らかの感情を読みとることはできなかった。
「これといった証拠を提示することはできませんが、そもそもこの数年間というもの、我々河童はそちらの世界におじゃましていないんです。知り合いの狐が外部の者をもたらしてくれるので特に問題はないんですよ」
「あんちゃん、あれはどうなんだ。多賀神社の出入口」
「ああ、そうでした。帰りがけに多賀神社の床を見てみて下さい。結構ホコリが積もっていると思いますよ。少なくともこの数日間は外に出た形跡がないことがわかるのではないでしょうか」
「この世界と人間界をつなげているのはそこだけなのか？」
「そうです」
これはどうやら信じるしかなさそうだった。別に嘘を吐いてもしょうがないことである。あれだったら先ほどの狐に聞いてみればいい。
河童であれば遠野屋旅館の二〇二号室、窓の隙間を通過できそうだったが、そもそもそっちに行っていないのならしょうがない。奴らはシロだ。
「わかりました。どうも変なこと言っちゃってすみませんね」
「いいえ。滅相もないです」
「探偵さんだもんな。捜査頑張ってくれい」

振り出しに戻った。元々河童が犯人だとはあまり思っていなかったが、やはり駄目なようである。
事件のことばかり考えていると、あまりここに長居できない気分になってきた。最終日の新幹線はすでに予約してある。それに間に合うよう帰らないと行けない。
河童の村で余暇を過ごすのも非常に魅力的だが、というか是非そうしたかったが、あいにく東京に帰ったらまだ仕事は山積みである。それに今は早渕殺しをなんとか片づけなければ行けない。どうだ、これが忙殺探偵だ。
「ごめんなさい、そろそろ帰りますね。色々ありがとうございました。すっかりお世話になっちゃってすみません」
「そんな、気にせずもっと長く居てもいいんですよ」
「あなたみたいな人ばかりが観光客なら、遠野ももっと良くなるんだがなぁ」
「お別れか。残念だな」
「また来いよ！　いつでも待ってるからな」
河童たちは次々とお別れの言葉を告げた。思わず胸がいっぱいになってしまった。
「振り向かずに歩いて行け」
俺は河童に言われたとおり、一度彼らに頭を下げると、それっきり目指すトンネルを向いたまま歩いていった。
トンネルの反対側の出口は見えなかった。俺は闇の中をひたすら歩いていった。実に素敵な体験だった。
そして、意識を失った。
好奇心の赴くまま、一度後ろを振り返ってみれば良かっただろうか。
今となっては、もう遅い。

※　※　※

銃声が響いた。
俺の背後には何者かがいた。
得体の知れぬ言語で話しかけてくる。
どうやらまだ仲間がいたらしい。後ろを確認していなかった自分がいけなかった。完全に油断していたのである。
俺は覚悟した。
これで終わりだろう。
「貴様。そこで何をやっている」
どうやらこいつは日本語が話せるらしい。低く響く、冷淡なバスの声だった。ここでのバスとは音楽用語である。そこいらに積んである車両ではないのであしからず。
「おい、答えろ」
男は俺の首筋に何かを宛っていた。ＶＸガスか何かだろうか。拳銃の可能性もあるだろう。少

なくとも、スタンガンよりも強力な何かだ。
「ちょっと、物見遊山をね」
「ふざけるな。へらへらするな」
「俺は元からこういう顔だ。回りからは一応イカツイ顔で通っている。母ちゃんが生んでくれた顔にケチを付けちゃいけねぇ。それとも、お前日本語分かっているか？」
「バカにするな！　このマザコン野郎」
　腹に足蹴を喰らった。嘔吐物的な何かが口から出てきた。ちょっとグロいのであまり描写しないでおく。
「お前が今まで、何を見てたか言ってみろ」
　ノッポもこちらを睨んでいた。巨漢はひぃと言いながらビビっている。あいつはもうダメだ、よほど長い期間を経て更生していかんといけないだろう。
　一方、こいつら麻薬の密売班は相当頭が良いようである。まあ、密売している時点でバカなのは否めないが、知能犯なのは認めざるを得なかった。
　俺のような奴が迷い込まないよう、一人が取引をしてもう一人がその周囲を伺っていたのである。
　しかし、俺のことは舐めていたようだった。
　潔く退散してしまえばいいものを。
「あいにく、俺はいつも未来しか見えていないんだ」
「わけわかんねぇこと言うんじゃねぇ！」
「わからんのか、この屑ども。お前らが獄中でひぃひぃ言っている未来だよ！」
　そういうと、俺はスタンガンを空高く放り投げた。
　素早く身を屈め、日本語を喋っていた男に回し蹴りを喰らわす。
　スタンガンに気を取られてほんの一瞬間空を見上げた男は、もろに俺の打撃を受けた。
「ぐふっ」
　ひとまず成功。
　三時の方向へ飛んでいった男の拳銃を拾いあげ、男に向かって構える。
　しかし状況は依然不利だ。
　向こうは役立たずである巨漢を除いて戦力は二人。一方、こっちはたった一人だった。
「おのれ、何を！」
　二人の戦力を一人以下にするのは、一人と対峙するよりも簡単だった。
　片方を戦力として使い物にならないよう、足でも撃てばいい。
　そうすればもう片方も負傷者の介抱に回らざるを得ない。後は簡単だ。
　案の定ノッポは胸元から拳銃を取り出した。
　銃撃戦の火蓋が切って落とされる。
　バスは身を隠すには十分すぎた。俺は得体の知れない男の拳銃を操りながら、ノッポと銃撃戦を繰り広げた。少し使いづらいな。もっとも、不利にはならぬ。
　バスのミラーが歪む。銃撃は四方八方へ飛んでいく。敵は射程を定めるのが苦手なようだ。数

撃ちゃ当たる作戦だろう。
　バンバンバン……キュン。
　俺は頃合いを見計らい、低姿勢からの攻撃を続けた。ノッポは足下からの銃声にビビったようだったが、すぐに姿勢を持ち直すと俺を狙った。
　寸前のところでよけた。タイヤが餌食となる。空気が抜けていき、ニーリングでもしたかのようにバスは車体をわずかに傾けた。
　俺はさっと身を転じると、目測で足場を確認し、軽やかにバスの車両側部をタッタッタと駆け上がっていった。別に難しいことではない、足場さえ注意すれば誰にでもできる初歩的な芸当である。俺は在学時代に探偵実技で学んだ。安楽椅子探偵コースへ進んだ奴らに実力を見せびらかすためでもあった。結局、発表の場はこんな場所になってしまったけどな。
　三菱ニューエアロシティの真上に立った俺は身を屈め、真下へ銃撃を浴びせかけた。もちろん、相手が死なないよう急所は外した。
　……ドドドドドド。
　巨漢が混乱して頭を抱えながら慌てふためいていた。ふん、いい君だ。ノッポは俺がどこにるかもわからずそこら中に銃をうち続けていたし、後からやってきた男の方はこれといった武器もなく、身を潜めながら周囲を伺っているようだった。
　銃撃戦はなおも続く。
　乱射される銃の音はもはや心臓の鼓動音。
　途切れたら最後を意味する。
　日本語男に指さされる。どうやら気づかれてしまったようだ。
　こいつにも適切なあだ名が必要だろうか。
　まあ、安直にニラレバにでもしておこう。なんとなく髪型が似ていたからだ。
　そう、ニラレバが俺に気づいた。
　ノッポがニラレバの方を振り向く。
　これはまずい。
　俺は大急ぎで立ち上がり、バスの真上を走り抜け、隣りのバスに飛び移った。
　クーラー部分が一番後ろにあったのでおそらく車種は日野もやしだろう。
　もっとも、そんなことはどうでも良い。さきほどよりも狭いバトルフィールドになってしまった。
　俺は移動中に一瞬相手を見失ったが、相手は相手の方で弾の装着を行っていたらしく、一瞬静寂に戻ったのも頷けた。
　再開される銃撃戦。
　イツニナッタラワカルンダ？
　オレニカナウヤツハイナインダゾ。
　呪文のように唱える。
　暗示を自分に掛けることによって、自分の戦意を高めていく。多少のナルシシズムを必要とする職業だ。

敵もようやくコツを掴んできたようだった。
……ビュシュン！
その瞬間だった。
俺の頬の数ミリ脇を銃弾が高速で通過していった。
この一発はいい感じのひげ剃りになったものだ。俺は血の流れていない頬を触った。
既に俺は相手の髪を十八本ほど落としている。ノッポがモヒカンになる日も近いだろう。
しかし今は、落とした毛の数などどうでも良い。
任務に集中するのみである。
赤く爆ぜた。
煙が濛々と上がってくる。
また変な道具を使いやがったか。マトリョーシカという梱包方法といい、ドラえもんみたいなヤツだ。
首を傾げた。耳のすぐ近くを銃弾は走り去っていく。産毛が一、二本ほど飛んでいっただろうか。気が付くと、レバニラ……いや、ニラレバは俺の真正面に対峙していた。
「いつの間に上へ登ってきたんだ」
「さっきだ。見ていなかったのか」
「別にお前のこと見たくはねぇんだよ。商売柄、見なくちゃいけないだけだ」
「じゃあ仕事を怠った証拠か」
「いい加減にしろ」
銃口をニラレバに向ける。
「忙殺探偵をなめんじゃねぇぞ。あいにく、俺は忙しいんだ」
「なら楽にしてお前の自己同一性を奪ってやらぁ！　イッヒッヒ！」
向こうの方も麻薬の効果が現れてきたようだった。
攻撃が荒唐無稽になりつつある。しかし、銃弾の精度は上がっていた。この数分間のうちに上達したというのか。
カチャカチャ。
互いに銃弾が切れたようだった。
「ちっ、ついてねぇな」
顔を歪める。
「お互い様みたいだ」
いつの間にか、奴と至近距離にいた。
俺はレバニラレバ野郎と目を合わせた。
お互い、やるべきことはわかっていた。
背中をぴったりと合わせる。
ニラレバは、バスの下にいたノッポに何もするなと合図を送った。
巨漢は緊張とヤク中が相まって失禁しているようだった。情けない奴である。反撃しそうにもない。放っておけばいい。

男同士の真剣勝負。
銃弾をしっかり込める。
横浜の夜風が肌にしみた。バスの真上は一層風通しが良かった。
足下が滑りやすい。大型バスよりも幅が狭く、自由は効かない。
それでも、これが俺のバトルフィールドだった。
やるしかなかった。
準備が整ったようだ。
三歩ずつ前に歩み、振り返ったところでどちらが先に撃つかの真剣勝負。
西部劇で決着を付けるための常套手段である。
一歩、前へ進んだ。
風が吹き抜ける。
敵の足下に一滴の汗が滴った。
タイミングはいつだろうか。
バランスを保つことに専念する。
どうやら俺はすっかり敵を信用していたみたいだった。
その瞬間だった。
またもや俺の油断癖が悪い結果を招いた。
俺の臑をめがけて、相手は思いっきり足蹴してきたのである。
俺はバランスを崩し、落下したかと思った。
視界が空を捉える。ベイブリッジを走行する自動車の音を子守歌にして、俺はゆっくりと落ちていくはずだった。
気が付いたら右手に強烈な痛みが走っていた。
それは傷などによるものではなかった。
バスの屋根に手を引っかけ、俺はバスの側面にぶら下がっていた。
右手が俺の全体重を支えていた。
一度静止してしまえば、あとは軟着陸をすればいいだけだった。バスはそれほど巨大な建造物ではない。
バスの屋根上でニラレバが鬼のような形相を浮かべていた。靴で俺の右手をぐりぐりされる前に、俺は無事に地面へ着陸した。
しかし、目の前にはノッポの姿があった。俺のスタンガンを構えて。
「ハルト！」
ノッポは騒いだ。
次の瞬間、俺は不器用そうにスタンガンを握りしめたノッポに向かって突進した。
腕の方へぶつかる。
スタンガンの行き着く先、それはノッポの鼻だった。
「ギャアアアアアアアアァァァァ！」
声にならない悲鳴を上げ、ノッポはその場に倒れた。

しかしやはり、二人を相手にするのは無謀なことだったとここで悟った。
意識不明になったノッポの身体の前。バスから続いて着地してきたニラレバの銃弾。
ズキュン！　キィーン！
どうしてこんなに忙しいんだろう。
日は暮れだした。今や大黒埠頭の殺風景なＣ２バースは赤い火花が高速で交互に行き交うイルミネーションで彩られていた。そこでどのような死闘が繰り広げられているかもしらず、首都高湾岸線を自家用車で通行していた人々は、眼下の粋な演出にうっとりしていた。
地上で繰り広げられているのは死闘である。
バン、バン、バン。
銃撃戦が続く。

そして俺の意識は……急激に……。

■ＥＲＲＯＲ■

指定された記憶にアクセスできません。
再びアクセスを試みる場合は「更新」を、やめる場合は「中止」を選択して下さい。

→ＲＥＣＯＬＬＥＣＴＩＯＮ　ＰＲＯＶＩＤＩＮＧ　ＳＹＳＴＥＭ　ＥＲＲＯＲ
→ＷＩＴＨＯＵＴ　ＡＮＹ　ＭＯＶＥＭＥＮＴ，　ＲＥＴＵＲＮ　ＴＯ　ＲＥＡＬＩＴＹ　ＩＮ　ＦＥＷ　ＳＥＣＯＮＤＳ
→ＲＥＴＲＹ？
５、４、３、２、１、０……

※　※　※

長い夢から醒めたようだった。
今まで一体何をしていたのだろうか。
狐に出会い、河童の楽園へ赴き、過去の夢をなぞっていたのだ。
帰り道、あの狐には会わなかったようである。また会えるかと思っていたのに、少し残念である。
トンネルを歩いているといつの間にか意識を失い、気が付くとホコリまみれの部屋に存在していた。部屋の中央には丸い鏡があり、覗き込んだ俺のあほ面を映し出していた。さっさと出て行けという意味らしい、古事記的な意味で。
天照大神の振る舞いを意識して腰を上げ、辺りを見回した。さきほど俺が倒れていた場所以外はホコリ満載だった。確かにこれでは河童の通った様子はない。
何気なく外へ出た。先ほどと同じ方法だった。そこはさきほどの多賀神社だった。俺は再度河

童たちに感謝を告げると、苔だらけの階段を嬉々として降りていった。
　夕暮れも近かった。長い間俺はあの多賀神社の続く空間にいたようだった。
　あの体験は一体なんだったのだろう。まさしく俺の長年の夢が叶った瞬間だった。河童を追い求めてウン十年、ついに彼らとの接近に成功したのである。それだけではない。心を通わせつつ、かなり楽しい時間を共有することができた。遠野に来た価値があったというものだ。
　しかしあれが現実の出来事なのか、夢だったのか、どちらかだと断定することはできそうにない。

第四章「緑色のコーラ、ボールペン、まれびと」

晴れたためしはない。俺はきっと遠野の青空を見る前にこの地を去るのだろう。
天候は一向に改善されない。太極図でマーブリングをしたような空だ。
しかし、俺の心はやけに晴れやかだった。
人通りの少なく見えた遠野の街が見違えって見えた。
郵便ポストの中をがさがさとまさぐり、いたずらを仕掛けようとする河童の子供達。
各家庭の門前に立ち、楽しげに鞠を搗く座敷わらし達。
嬉しげに魚を巣へ持ち帰る狐の群。
狐を騙したカワウソの大あくび。
その他、各施設、自然、土地に宿る数々の神様達。
そんな幻影が俺の網膜に映っていった。
もちろん、それは単なる俺の妄想だった。けれども、おそらくそれは遠野に住まう全ての人々が見ている光景だった。
人通りが少ないのではなく、すでに街は活気に満ちあふれていたのである。それを今まで想像できていなかっただけだ。
そして、遠野だけが特別だというのも間違っている。
ここで俺が体験しているこの時間は、かつての日本であればどこでも流れていた時間なのだ。
今一度、日本の全てをこのような風景に戻すことは不可能だろう。全部がこんなに平和ならば、俺の仕事はなくなってしまう。
けれども、どことなくこの懐かしい雰囲気が、もっと身近に、いつまでも続いて欲しいという思いは切にあった。矛盾した心境だった。
推理手帳を無くして以来、これといった推理が頭をよぎらない。普段ならもっとさくさくアイデアが出てくるのに、どうも調子が悪いようである。これは手帳のせいだけではないのだろうか。
その時だった。
突如として大型観光バスが現れた。道のど真ん中を行脚していた河童たちが慌てて歩道へよけていく。観光バスは道端に停車し、黄色い端を持った女性を先頭に観光客がぞろぞろと降りてきた。
俺の視界からありとあらゆる妄想が消えていった。門前で鞠を搗いていた座敷わらしたちはスッとドアの中へと消えてしまい、河童たちは山へ帰り、猿や蟹も行方を眩まし、神様たちもゆっくりと姿を消していった。後に残ったのは寂れた町並みと一部の人だかりだけだった。結局、それらは俺の妄想に過ぎなかったのだ。
これが現実だった。
俺は急激に自分が探偵であり、とある事件を捜査中だということを強く意識した。
このゆったりとした土地で人が殺害された。あってはならないことだった。
宿へ帰ってゆっくり考えよう、そう思った。瞑想すれば何かを発見できるかもしれない。

※　※　※

「あ、見つけた」
　帰路の途中、そこら辺を散歩していたのであろう合歓子に捕まってしまった。座敷わらしが外をぶらぶらしていていいのだろうか。
「お兄さんを探してたんですよ。多賀神社へ行ってみても気配がないですし、どこへ行っていたんですか？」
　河童の楽園へトリップしていたとは言いにくかったので、適当に買い物をしていたとごまかした。
「そうなんですか。宿に帰ります？」
「ああ」
「それじゃあ、一緒に帰りましょう」
　帰ると言っても、旅館はすぐそこである。目測で一〇〇メートル程度だろうか。まあ、別に断る理由はないだろう。
「わーい」
　嬉々とした様子で諸手を挙げながら、そそくさと俺に着いてくる。ペットショップに陳列されているハムスターのようだ。
　そのまま、無言で合歓子は俺に腕を回してきた。もちろん、透けて触れることはできないので、彼女がだいたい俺の腕くらいの位置で自分の腕を留めているだけである。端から見れば涙ぐましい努力だ。
「少しくらい、いいですよね」
　胸の奥がむず痒くなった。なんだろう、この感覚は。
　ともかく、とてつもない笑顔で言われたから断ることができなかった。だいたい、追い払うこともできない。
「もう、好きにしろ」
　さながら親子のように、腕を組みながら俺達は遠野の町を歩いていた。彼女を見ていると、なんだか気が狂いそうだった。
　ここまで来ると、どうして俺をそんなに慕っているのかわからなくなる。
「合歓子」
「なんですか？」
「どうしてそんなに俺に構ってくるんだ？　何か、特別な事情でもあるのか？」
「いいえ。私はただ、嫌いになって欲しくないだけなんです。あたしと、この町を……。そのためにどうやって振る舞ったらいいかいまいちわからなくて、迷惑だったらごめんなさいね」
　彼女が言うと、なんとなく二人とも黙り込んでしまった。
　なんとなく気まずかったので、前から聞こうと思っていたことを尋ねた。
「そうだ、合歓子」

「なんですか？」
「俺の手帳、知らないか？」
「手帳ですか？　見た目はどんな感じなんですか？」
「茶色くて古い。推理手帳って書いてあるから見りゃわかる。ずっと肌身離さず持っていたんだが、行方不明になってしまって、女将さんにも頼んであるんだけど見つからないんだ」
「うーん、知らないです」
「パクってない？」
「むぅ、そんなことしませんよ！」
　頬をトラフグにように膨らませながらそう言った。俺が合歓子に冗談だよと言おうとした矢先だった。不意に彼女の瞳が対象を捉え、合歓子は大急ぎで電柱の影へと身を潜めた。
　俺は唖然として立ちつくしていた。
「どうしたんだ、合歓子」
「いいから隠れて！」
　合歓子はウィスパーヴォイスで俺に語りかけた。どうやら真剣な様子だったので、俺は合歓子の言うとおりにした。
　電柱の裏にある狭い空間、合歓子の背中が距離的に密着する。触れあっている感覚はない。合歓子は口元に人差し指を宛いながら、いつになく真剣な表情で周囲の様子を伺っていた。まったく、座敷わらしがこそこそ隠れてどうするんだ。
「ほら、あそこ」
　合歓子が指差した先を見てみる。すると、なんだか疲れ切った様子で宿から出ていく不審者の姿を俺は目撃した。
「何だい、あいつは」
「知らないです。ひょっとしたら、お兄さんの手帳を盗んだのも……」
　そいつはあたりをきょろきょろ見回しているようだった。おそらくは男性であろうけれども、若くて女性っぽい顔立ちをしている。足取りがおぼつかない。
「おい、良く見て見ろ」
　色鮮やかな制服を身にまとっていて、胸元にはプペシコーラと書かれている。
　自動販売機でもチェックしに来たのだろうか。きっとそんなものだろう。
　土地に不慣れなせいなのか、足取りがおぼつかない。ふらふらとどこへともなく彷徨っている様子である。
「な、なーんだ……」
　まあ、特に事件には関係ないだろうと思い、結局俺は声を掛けなかった。恥ずかし気にどこかへ消えてしまった合歓子を探すこともせず、そのまま堂々と玄関へ向かった。
　後でよく考えてみれば、容疑者の可能性が非常に高かった。
　どうして声を掛けなかったんだろう。
　まあいいか、悔やんでもしょうがない。俺はすっかりおなじみとなった遠野屋旅館の中へ入っていった。

宿ではまだ捜査が続いていた。相変わらず地元警察の言語は理解できなかった。俺はいったん自分の部屋に向かって疲れを癒そうとした。
部屋の前に得体の知れない段ボールがあり、中にはプペシコーラのキューカンバー味が一年分くらい入っていた。
これはまさか河童からのお餞別だろうか。
うげぇ、いらねぇ。
もっとはっきりこれは嫌いですと言っておけば良かった。
俺は部屋の中でしばらく考え事をしていたが、いっこうに思考がまとまらないので、ぶらぶらと一階へ降りていき、女将さんに捜査が進展したかどうかを尋ねた。女将さんは宿泊客名簿を書いている最中だったが、俺の話に応対してくれた。
「犯人は依然見つからずですね。密室の謎は解かれていませんし。あ、でもちょっとしたヒントみたいなのは出ましたよ」
「何ですか？」
「ほら、覚えてます？　事件当日、遠野市の職員が通行量調査をやっていたのを」
ああ、そういえばそんなのがあった気がする。
「あの方たちがうちの前の通行量を調べていたみたいなんですよ。ちょうどこの旅館を挟むように二カ所。この旅館にくるためにはどちらかの前を通らないといけないんですね」
「それで、何か判明したんですか？」
「まず、車の通行量はゼロ。自転車も同じ。問題は歩行者だけど、結論から言えば多数あったようです。けれどもその多数というのは高校の生徒で、その日は基本的に集団登校・下校だったみたいなので、これは除外しても良いんです。それ以外だと私の子供たちと、新聞配達のアルバイト、夏岩順治さん。あとは旅館の前にある自動販売機の見回りにきたプペシコーラの販売員の峰村三吉さんですね。逆に宿の従業員や私の夫は一歩も外へ出なかったそうです」
プペシコーラって、まさか。
「そうそう、取り調べの際、峰村さんが売れ残ったという飲み物を持ってたので、ご自由に飲んで良いですよ、部屋の前に置いておきました」
ああ、あの人か。先ほど宿から出ていったプペシコーラの若い人。
どうやら河童のお餞別ではなかったみたいだ。それにしても馬鹿げた偶然である。まあ、あの味では売れ残ったのも頷ける気がするけれども。
「警察は夏岩さんと峰村さんに事情聴取をしたそうです。どちらも早渕氏に対して良く思っていなかったそうですが、殺害に至るまでの憎みがあったかどうかは不明です」
「実際犯行は可能そうでした？」
「いや、結局はあの密室がどうにもならないじゃないかとつっこまれて終わりました。両方とも大人なので窓の隙間を通るには大きすぎますし、他に抜け道もないようです。まあ、あったらそれはそれで困るんですけどね」
女将の言うとおりである。
「一応、警察の方から事情聴取の映像を極秘でもらったんですけど、見ますか？」

「え？」
　どうしてこの女将さん、そんな極秘情報を握っているのだろうか。
　もしや遠野ではかなりの実力者なんじゃないか……。
「あらいやだ、お客さんの名前を警察に教えたら、これを見せてヒントにして欲しいって言われたんですよ」
　やはりそういうからくりだったか。しかし、岩手の警察と話は通じなくとも、名前を覚えてくれているだけでありがたい。
「じゃあ後でセットしておきますね」
「ありがとうございます」
　女将さんには頭が上がらない。
「捜査頑張って下さいね」
　励まされる始末。面目ない。
「今回の事件はどうもうまく行かないんです。普段なら情報が瞬く間に集まってくるのに、今回はまるで、……」
　何かが、俺の妨害をしているようだった。
　俺のごく身近にある何かが、わざと俺から事件の鍵を遠ざけているような気がしていた。
　それが一体何であるかはわからない。事件とどのような関係があるかもさっぱりわからない。
　ただ、その正体が掴めれば、事件に何らかのヒントを与えるだろう。
　しかしまあ、一体何なのだろうか？
「なんでしょう？」
　女将さんに聞かれたけれど、冷静に考えてみればこんなのは科学的でもなんでもない。
「あの推理手帳というのが、よほど重要なんですか？」
「わからないんです。あれがないからアイデアが浮かんでこないのかもしれません。でも、あの手帳はあくまでも普通の手帳なんですよ。別に魔法とか、特別な力が働いているわけでもなく、ただ肌身離さず持っていたものだというだけなんですね」
「ある意味、そういうのも呪術的な物かもしれませんよ」
「だから、わからないんですよ。何もかも」
　ストレスが溜まっているせいか、女将さんに強く当たってしまっていた。少なくとも、そういう口調になっていた。女将さんを責めることはないのに。
　愚痴を零すのはやめて、別の話題にしよう。
「そういえば女将さん、全く話が変わるんですけど」
「なんでしょうか？」
　話の切り替えも早い。この人はただ者ではない気がする。
「座敷わらしって、物質を掴むことができますか？」
　合歓子にしたのと同じ質問を投じてみる。
「うーん、無理だと思いますよ」
　女将は答えた。理由を聞いてみたが、合歓子の説明とだいたい同じだった。

「属性はまったく違いますが、存在としては、座敷わらしは幽霊と似たような感じなんです。ともに人間界の物理レベルにはさほど作用しない存在で、精神レベルの住人ですね。多分、精神レベルの霊達が所有する物と、人間界の物理は性質が違うんでしょうね。人間が死んだ時に衣服や備品を精神レベルへ引きずっていくことはあるでしょうけど、それはあくまでも人が死ぬ時の話。まあ、あんまり難しいことになるとわからないんですけどね」
「ましてや、鈍器で人を殴るなんてことは……」
「ないでしょうね。座敷わらしは悪いことの前触れだとか、間引きのために殺害した子供の幽霊だなんて噂もありますが、私は柳田国男や折口信夫が描くように、家の守り神、ある種の守護霊だと信じています」
　女将はよほど座敷わらしについて研究したのだろう。自分の旅館に出てくるものだから当然と言えば当然かもしれないが、それにしても詳しい。
　俺はすっかり女将に感心していた。
「座敷わらしが家から出ていくとその家が傾くと言われています。この家に住み着いた座敷わらしには末永く居て欲しいですね。だから、あえて座敷わらしの出る家だと宣伝してないんです。
　そりゃあ宣伝した方がお客さんはたくさんいらっしゃるでしょうし、青森の金田一温泉のとある宿なんかはそれで儲けているみたいですけど、うちはうちのやり方でずっとやっていこうと思うんです。座敷わらしさえ居てくれればうちは末永く大丈夫だと信じてます」
　それは殊勝な心がけだった。リピーターはいるだろう。俺もいつか、再びここへ来ることにしよう。今度こそ事件と関係ない時に来るんだ。
　女将は俺との話を終えると、フロントの脇にあったパソコンを操作し、事情聴取の映像を出してくれた。俺がそれに見入るのを確認すると、女将さんは厨房へ消えていった。

※　　※　　※

「それじゃあ、全く手がかりがなかったのですか？」
　部屋の中央、合歓子はうつぶせになって両手で首から頬を包み、肘で上半身の体重を支えていた。バタ足の要領で短い足を交互に動かしている。いつの間にか再びやってきたのだ。神出鬼没である。
「そうなんだ。今回の事件は明らかにおかしい」
「何がですか？　なんだか、お兄さん落ち込んでいるみたいですけど」
　俺が落ち込んでいるだって？
　言われてみればそうかもしれない。確かに、今回の事件に関してはいつものようにうまくいかない。
「事件の全貌がまるで掴めない。普段なら情報が多すぎてそれを絞っていくだけなのだが、今回は極端に情報が少ない。手帳がないから情報が整理できていないだけかもしれないが、そんなに情報は多くないから、特に問題はないはずなんだけどなあ」
「河童が犯人という説はどうなったんですか？」

「河童の犯行は無理そうだ。それに、やはりここはヴァンダイン二十則やノックス十戒から逸脱したくない」
「なんですか、そのヴァンなんとかとノックスなんたらって？」
「本格推理小説のルールみたいなもんだ。非現実的なことはよそうとか、ありきたりでセコいトリックを使うなとか、だいたいそんな感じだ」
　ルールと雖も、当時はまだ本格ミステリーがそこまで発達してない段階で、何を書けばいいかという指標という意味合いで作られた面が主だった。今はこれからやや外れたものでも十分通用するとかの江戸川乱歩が言っているように、今となっては参考程度なのだが、一つの目安にはなるだろう。
「要するに、あまり現実離れしたトリックではないことを願っているわけですね」
　合歓子に頷いた。その説明さえすれば十分だった。何も難しい専門用語を持ち出すことはなかった。
「何かこう、難しく考えすぎているのかもしれませんよ」
　合歓子が一緒になって推理してくれる。
「河童じゃなくても、遠野には変な動物がいっぱいいますけど」
「その中で、人を殺しかねない奴はいるか？」
「基本的にはいないでしょう。いないと信じたいところです。でも、他に容疑者がいなくて、考えられることは……狐ですかね？」
「狐か……」
　合歓子がその動物名を掲げたのは単なる偶然なのだろうか。俺の記憶が確かであれば、つい先ほど、河童の国へ行く前に会話したばっかりである。もっとも、犯罪をしそうな奴ではなかったが。
「よかったら、一緒にお話に行きませんか？　狐の所へ」
　小動物が果たして殺人事件など起こすだろうか。常識的に考えれば、いや考えることすら馬鹿らしかった。俺はヴァンダインに笑われるだろう。
　けれども、俺は思わず合歓子に対して頷いてしまうほどせっぱ詰まっていたのである。
　別に狐を疑っているわけではない。けれども、容疑者は全員くまなく調査するというのは犯罪捜査の基本である。
　俺は余所者だ。郷に入りては郷に従えと言うではないか。現に俺はたった今も合歓子という科学を超越した人物と対峙している。
　遠野は霊的な存在が支配する空間だ。人間界の暴政をいち早く沈めようとするのは、人間ではなくてそういった霊的存在なのではなかろうか。
　狐は多賀神社を暫定的に守っている存在である。ちょっとくらい話を聞いてみよう。
「やったあ！　待ちに待ったデートだ」
「デートでもへったくれでもねぇ。捜査だ」
　俺が冷静な声で言うと、合歓子は思いっきりふくれっ面をした。全日本にらめっこ選手権で優勝しそうな顔だった。

「私のこと、ひょっとしてバカにしてるんですか？」
　両腕をぶんぶん振りながら合歓子は尋ねる。
「そんなことはない。これは真剣な捜査なんだ」
　俺が予想外に生真面目だったことに驚いたのか、合歓子は両手で口を塞いで不思議そうな表情になった。
「俺は巷で忙殺探偵と呼ばれている。誰が名付けたのかは今となって知る由もないが、その名の通り俺は死ぬほど忙しいんだ」
　俺が誇らしげに語ったとき、合歓子が少し寂しそうに頷いたのを、俺は見逃さなかった。
　何か間違ったことを言っただろうか？

※　※　※

　話すこともなく、物静かに合歓子は俺を先導していく。とかく騒ぎまくっていた今までとはうってかわって物憂げな様子である。また、俺は人を困らせてしまっただろうか。いかんいかん、こんなことでくよくよしているからハードボイルド探偵が務まらないんだ。もっと冷静になるんだ、この俺。
　とは言え、座敷わらしに先導されて事件を捜査しているこの滑稽な有様から鑑みれば、どだい無理な話だった。しかし周囲をよく見回してみればどうやら滑稽なのは俺だけで、合歓子の方はこの町にしっくりマッチしている。
　合歓子の真っ赤な和服姿は、道端で誇らしげに咲き誇る幼い曼珠沙華である。今は俯き加減に自身の影を見つめているが、やがて機嫌がなおれば太陽に向かって手を伸ばすであろう。別段気にしていなかったが、客観的に見てもこれほど容姿端麗な少女も珍しい。現代風の美しさというよりも、かつての日本人像と酷似している。木造の暖かみのある日本家屋がまばらに建ち並び、皆を昭和以前の小世界にワープしてしまったような心境にさせる遠野の町で、見渡す光景がセピア色に褪せてしまわぬよう、彼女という花が咲いているようだった。
　くっ。
　頭痛が走る。
「大丈夫ですか？」
　合歓子が慌てて声を掛けてきた。大丈夫、いつものことだ。
「なんだか顔色良くなさそうですよ」
「大丈夫だ。もし青かったとしても、頭痛とは関係ない。目の前にお化けがいるからじゃないか」
　冗談を言ってみた。合歓子は本気にしなかった。なんとなく敗北感たっぷりだった。
　気が付けば俺は思わず額に手のひらを当てていた。何が問題だったのだろうか。痛みはすぐに収まった。
　何か、見てはいけない物を見てしまったようだった。
　周囲を見渡す。そこにあったのは何の変哲もない民家と、遠野市の行政がやっているという通行

量調査のテントもどきくらいだった。合歓子とともにその前を通り過ぎると、おっさんたちが手元の紙に鉛筆で線を一本入れる。一本のみである。どうやら合歓子のことは認識していないらしい。
　遠野は魅力的な町だった。いつしか、俺は自分の故郷の町と光景を重ね合わせていた。赤トンボの飛び回る庭先を見つめながら、縁側に腰掛けて母ちゃんとともに過ごした少年時代。そんな、誰もが有している原風景と重ねられた。人々が遠野で見つける最高の物語は、自分自身の半生なのかもしれない。
「合歓子」
「何ですか？」
「お前、ひょっとしたら良い奴なのかもしれないな」
　一気に頬を紅潮させ、合歓子は俯いた。
「それ、どういう意味なんですか」
　小さい声で呼びかける。
「他意はないさ」
　俺がそういうと、再び合歓子は呆然と地面を眺めながら歩んでいた。
　やがて市立図書館の裏に到着した。相変わらず鬱蒼とした茂みがつづいている。かつては南部藩が城を築いていたこの地も、今となっては兵どもが夢の跡である。
　合歓子は子供でしか通らないであろう獣道をさくさく登っていった。しょうがないので俺も後を続いた。やがてやや広くあけた場所に到達し、合歓子は中が空洞になっている大木の穴をのぞき込んだ。
「おーい」
　返事はない。
「合歓子だよ。出ておいで」
　自己紹介を済ませると、合歓子はこちらを振り返った。
「早く、お兄さんも狐を呼んでやって下さい」
「呼べば出てくるのか？」
　そんなに単純なものなのか？
「はい、そうです」
　再び穴の中へ声を投げ込む合歓子。ここで黙っていてもしかなたいので、俺も空間に自分の声を木霊させた。
　やがて中で黄金色の何かがうごめいているのが見えた。それは鼻先をこちらに向け、周囲を伺っている様子だった。
「ほら、でてきたでしょう。こんにちは、狐さん」
「なんだか日本語通じるみたいな言いぶりだな」
　俺が合歓子を揶揄して言うと、彼女は逆に俺を馬鹿にするように口を開いた。
「お兄さん、遠野の狐は日本語を話すんですよ」
「本当？」

　俺が体験したあれは、夢ではなかったというのだろうか。
「普通の人間が突然話しかけたのじゃダメです。長年遠野に住まい、自然と調和できる人、特に子供でなければ動物たちと通じ合えないです。でも、お兄さんにはその資格があるから大丈夫でしょう」
「資格ってなんだ」
「おいおいわかりますよ」
　合歓子は秋桜のように微笑んだ。こいつには敵わない。
　そうこうしている内に狐は木の中からでてきた。先ほど俺が会話した奴だろうか。似ていると言えば似ているし、違うと言えば違う。狐の顔など判別つかない。
「ほら、しゃべってご覧」
　狐は潤んだ瞳で怪しく迫る合歓子を凝視していた。
「俺は羽黒荘介だ。先ほどはお世話になった。もしもこの顔にピンと来なかったら、仲間にそう伝えて欲しい」
「何かあったんですか？」と合歓子。説明が面倒臭いので、いや何でもないと彼女には伝えてお茶を濁した。
　狐は依然、訝しげな表情を浮かべてこちらを見つめている。日本語を話す様子も、コンと啼く気配も感じられない。
　合歓子はなんだか焦ってきたようだ。
「ほら、狐さん。本日は晴天なり、本日は晴天なり」
　ご覧の通り本日も曇天である。
「返事して下さい〜お願いですから」
「返事してやってくれ。後生だ」
　なんだか馬鹿らしかったが、合歓子が真剣だったので、あと捜査のこともあったので、声援に加わらざるを得なかった。それでも狐は口を開かなかった。
「ねぇ〜お願いしますよ……」
　合歓子は半べそを浮かべながら懇願していた。
「いつもは気軽に話しかけてくるじゃないですかぁ」
「本当にそうなのか？」
「そうなんです！　信じて下さい、お兄さん」
「俺からも声掛けてるけど、無理っぽいな」
　狐は依然その場で立ちつくしたままだった。逃げる気もないらしい。これはこれで珍しいと言える。俺達の話は聞いているのだろうか。理解できない。
　合歓子はやけになっていた。
「もう、どうしてしゃべってくれないんですか？」
　もちろん、返事はない。
「うえーん。話して下さいよぉ」
　乙女の涙大作戦も小動物には効果なしといったところだ。

「合歓子、もういいや。諦めよう。どうせこいつは犯人じゃない」
「だって！　いつもなら気軽に声を掛けてくれるんですもの！」
　狐の方はなんだか怯えている様子である。目の前の不審者が理解できないといった様子だろうか。その不審者が合歓子なのか俺なのか、両方なのかはわからないが。
　鍋倉城址の片隅、大木の穴に向かって叫ぶ不審な着物少女と、忙殺探偵の姿があった。その光景はもはや悲劇を通り越して喜劇と化している。合歓子の必死さは痛いくらいに伝わってきたが。
「話せばわかる！」
「問答無用だ」
「お前さんにも家族がいるだろう、話して楽になりなさい」
「警察の脅迫かよ」
「なんじ大いなる狐よ、もしなんじにして話すべきものなかりせば、なんじの幸福はそもいかに？」
「お前、どうしてニーチェなんて知ってるんだよ」
「うわあああああああああああああ」
「無意味に叫んでも無駄だ」
　次の瞬間、狐はこちらをきっと睨んだ。
　狐に似合わない円らな瞳。黄金色の毛並みでもこもことした小さい体。果たして、これはあの時に出会った狐なのだろうか。
　真偽のほどはわからなかった。しかし、そいつが俺に何らかの興味を示していることは明らかだった。
　前脚で自分の口元をぬぐう。それから地面をたったと蹴る。
　こいつは一体何がしたいのか。
　そして、その狐は後ろ足のクッションを効かせながら、俺の顔面めがけて突然襲いかかってきた。

■ＥＲＲＯＲ■

ＵＮＫＮＯＷＮ　ＥＲＲＯＲ　ＯＣＣＵＲＲＥＤ
ＵＮＫＮＯＷＮ　ＥＲＲＯＲ　ＯＣＣＵＲＲＥＤ
ＵＮＫＮＯＷＮ　ＥＲＲＯＲ　ＯＣＣＵＲＲＥＤ

※　※　※

　銃弾は反れただろうか。命中しただろうか。
　潮風は凪いでいた。ベイブリッジを自家用車が高速で通過していく。シュン、シュン、シュンと音が聞こえていた。横になっていた俺は身を起こした。遠くでよこはまコスモワールドの観覧

車が派手に明滅している。
　地面には血が派手に飛散している。悲惨な光景だ。一人分の血だけではあるまい。
　俺は立ち上がった。大きく背伸びをして、あのニラレバ野郎がいなくなっていることに気が付いた。
　ちくしょう、逃がしたか。
　そのとき、その場に落ちていたトランシーバーからボスの声が流れ出した。
「……ガッガー……ブッ……お疲れさま」
　電波の調子が悪い。よく見れば、アンテナがタイタニック号のように真ん中からまっぷたつに折れている。これはもはや使い物にならないだろう。
　俺はそのトランシーバーから流れる最後の音に耳を澄ませていた。
「……麻薬密売の三人は……ちらの方で取り押さ……た。そちらの方へ救援を派遣できなくて申し……ない。ご苦労様、身体を休めてゆっくり休暇を満喫して来なさい、それが私からの緊急指令よ」
　肝心なことは聞こえた。どうやら、なんとかなったようだ。
　周囲に人影は見えない。大量の物資を輸出入するためだけにある土地。これこそが、貿易港横浜の真の姿である。みなとみらいなんてまやかしにすぎない。日本経済を救っているのはこの荒れ果てた光景である。
　バスならバスだけが大量に集まっていて、トラックならトラックしかりで膨大な数があり、それはもう気持ち悪くなる光景だった。このままここに居座ると、自分の存在がわからなくなりそうだった。
　いち早くここを出よう。今から東京駅へ向かえば、釜石線の最終列車に接続する新幹線に間に合う。
　とことこと車の間を歩いていった。本当に同じ車両が何台も何台も続いていて辟易する。やり場のない風景。
　やがて、俺が車を駐車した場所に到着した。
　まあ、このように表現することは何を意味するのかというのは邪推してもらえばわかると思うが、念のため言っておくと、俺の愛車が消えていた。
　俺のアウディはどこへ行った？
　よく見ると、駐車してあったところまでポツポツと血痕が続いている。
　どうやら犯人はこれで逃走しようとしたらしい。馬鹿な奴だ。
　それでボス率いる一味に取り押さえられたのだろう。めでたし、めでたし。
　……。
　……。
　全然めでたくねぇ！
　俺の車はおそらく犯人によって乱暴な運転をなされ、銃撃に合い、今頃廃車解体されているに違いない。
　愛車と駆けめぐった輝かしい日々が走馬燈のようにリフレインする。六本木ヒルズで駐車違反

を喰らったあの夜。２４６で免停を喰らった暑い夏の日。ドライブスルーの店員にスルーされた昼下がり。
　もういいや。歩いて行こう。
　今頃は遠野に到着し、河童を見ているはずだったのに、出発当日の朝急遽呼び出されて、麻薬密売野郎ととんだ一悶着を繰り広げた上、車まで盗まれるなんて不幸この上ない。
　俺は不幸の星のもとに生まれたのだろうか。
　小学生時代に江戸川乱歩の探偵小説を読みあさり、ミステリーに興味を持った。その後は名探偵になりたいという夢に向かって突き進む毎日だった。自慢ではないが探偵を排出する専門学校をトップレベルの成績で卒業し、それから多忙な毎日が始まった。
　確かに有名な探偵にはなったし、忙しいこともあって忙殺探偵なぞと呼ばれているが、自分が少年の頃に抱いていたワクワクするような展開はまずない。たいていは下らぬ怨恨故の突発的な犯罪か、金か名誉欲しさについついやっちゃって後悔しだすというラスコーリニコフのような犯罪である。
　事件自体が退屈だというのは不謹慎かもしれない。けれども、本当に下らぬ犯罪が馬鹿みたいに多かった。そんな事件に振り回され、自己のアイデンティティーが思わぬ方向で定着し、今に至る次第である。
　果たしてこれでよかったのかと自己に疑問を呈する毎日だった。ボスは信頼できる良い人である。けれども、良い人以上の何かはない。
　そして俺も探偵以上の何物でもない。ただ、毎日忙しく暮らすだけである。
　先ほど下ったボスからの指令は、休暇を満喫するということだった。俺はきっとこれから遠野へ向かって、ゆっくり過ごすのに忙しくするのだろう。
　こうして休暇を削って戦った結果も、そこにあったのは一握りの虚無感だった。ボスの命令だから仕方がない。しかしなんというか、味気ない人生だった。
　周囲の風景を見つめる。イメージだけは良い横浜の湾岸だが、その実体は輸出物品や輸入物品でひしめいている巨大なゴミ箱のようだ。名探偵という仕事もそんなものだろう。俺はそんなことを考え始めていた。
　それにしてもひどい風景である。人間の生活感が全くない上、遠くをみれば横浜みなとみらい地区の観覧車が傍観でき、それが一層この土地の敗北感を物語っている。どうしようもない。俺は俯くしかなかった。
　そのときだった。
　ライトが煌々とこちらを照らした。軽快なエンジン音とともに、車輪を滑らせて現れたのは一台の路線バスだった。
　横浜駅まで行くらしい。ラッキーである。
　俺は首から下げていた、名探偵に国から支給される交通機関無料パス（いざ、犯人の追跡を行うために運賃支払いなどで戸惑わないようにするため）を指さして胡散臭い運転手に見せびらかし、深々と腰掛けた。どうやら予想以上に疲れている。青い座席にはシートベルトがついていた。これからベイブリッジ・首都高を経由するからだろう。

俺は目を瞑った。横浜でバスを降りた後は東海道本線で東京駅へ向かい、新幹線に乗り換えて新花巻を目指す。普段の捜査に比べれば簡単この上ない。問題は、ゆっくりくつろげるかどうかだ。
やがてバスは出発した。大黒埠頭を一周してからベイブリッジに乗る変な路線だった。
俺は河童に会えるかどうかを気がかりにしていた。前から好きだったUMAである。やっぱり会えるとしたら本場、遠野だろう。
ベイブリッジを通過したバスはそのまま首都高湾岸線に入り、トンネルの中を爆走していった。路線バスが首都高を走っているなんてシュールな光景である。
薄暗いトンネルの電灯が幾つも前の方からやってきて、側面を通り過ぎ、後ろに遠ざかっていく。そのたびに窓を通して入ってくる光の筋がバスの床を移動する。しばし俺の目を襲う。
俺は一つの電灯を見いだし、それを追って後ろを振り返った。俺が解決した事件のように、さまざまな過去が遠くへ去っていった。

※　※　※

天啓に従って後ろを振り向いた。
そこには今しがた軟着陸を遂げた狐の姿があった。
合歓子は口に手を当ててこちらを見ている。
一体何が起こったというのだろうか。
狐はこちらを振り向くと、前脚で自分の頬を可愛らしい仕草ですりすりしていた。無邪気な様子である。あのときの狐によく似ていた。
「どうしたんですか、お兄さん」
合歓子が心配そうに尋ねてくる。
「いや、なんでもない」
なんでもないはずである。ただ少し、違和感があっただけだ。そう思いこみたかった。
目の前で空間がよじれていくような感覚に襲われる。狐はなおも言語を話そうとしない。先ほどは俺となんだかんだしゃべっていたのに、今は言語野をロボトミー手術で除去されてしまったようだ。
何かがひっかかっている。
単純かつ抜け目のない密室殺人事件。おそらく市民のほぼ全員に嫌われていた被害者、動機の推測は必要なし。
問題はあの密室とフーダニット（誰がやったか）。
これ以上狐に用はないのでその場所を去った。あえりあ遠野脇の坂道を下り、町中へ出た。相変わらず人通りの少ない町だった。車も減っているような気がする。
合歓子は落ち込んでいた。狐がしゃべってくれなかったのがショックらしい。よくわからないけど、へこむのだろう。
本当にへこみたいのはこっちだったが。

普段ならもっとうまく行くはずである。今回は、何かが確実に捜査を妨害している。
合歓子だろうか。いや、彼女は物に触れることができないだろう。俺に催眠術を掛けて何かを守っていることは考えられるが、直接の犯人であることは考えにくい。
女将さんだろうか。普通の警察ならばまっさきに彼女を犯人に仕立てるだろう。動機も十分だし、部屋の構造を誰よりも熟知しているのはなんといっても女将さんである。彼女ならどうにでもできる。ただ、アリバイの問題はどうしようもなかった。
時空が歪んでいるのだろうか、この町は。
一歩前へ踏み出すと過去へ後退する。一歩後ずさると未来へ躍進する。そんな、理解しがたい風土であるような気がした。
「犯人がわかったんですか」
歩きがてら合歓子が尋ねてきた。もうすぐ遠野屋旅館に着きそうだった。
「もう、喉まで出かかっている。決め手が見つかってないだけだ」
捜査が順調に進んでいるのは嘘だった。
「嘘でしょう」
「どうしてわかる」
「その言葉からわかります」
「卑怯だぞ」
「しっかりしてください。お兄さんは探偵なんでしょう？」
そうだ。俺は探偵なんだ。しっかりしなくては。
「この事件は、お兄さんにしか解けません」
そういうと、合歓子は久々に満面の笑みを見せた。
やがて遠野屋旅館の玄関に至る。合歓子はさっさと二階へ上がり、俺の部屋へと消えていった。なんだか俺は疲れてしまって階段を登る元気すら失ってしまった。
「大丈夫ですか？」
女将さんの登場。ここに来て、何回その言葉を投げられたことか。
俺は無言で頷いた。
「捜査はうまく行ってますか？」
「いや、めっきりダメなんですよ。どうやら、何かが俺の推理を邪魔しているんです。いつもだったらもっと、脳のシナプスに次々と水が注がれるようにいろんなことがわかるんですけど、今回はさっぱりだ」
「やっぱり、手帳が見つからないとだめですか？」
「そうは思いたくない。いや、断じてそうじゃないんだ」
手帳に頼るのも馬鹿らしいと考え始めた。もう自暴自棄になっていた証拠である。
「何か、他に原因でも？」
「ここに来てまったりしすぎたんでしょうかね？」
遠野に来ていろんなことが起きていたが、それでも普段に比べれば断然忙しくないし、河童たちと時間も忘れて楽しんだ。時間の存在を忘れたのは久しぶりだった。

　俺は忙殺探偵である。今までずっと忙しくしてきたのでわからなかったが、いつも忙しくしていないと推理力が継続しないのだろうか。
　そんな不安が、俺を苛んでいた。
「もっと忙しくなるべきなんです、俺は。そうじゃないと脳が活性化しない」
「お客様の今までの努力が分かりかねますが……そんなことはないと思いますよ。人間、冷静にならないと気づかないこともありますし」
　女将さんは心配な息子の相談に乗るような調子で受け答えしていた。
「今までは忙しければなんとかなっていたんだ。空いた時間も河童の研究に費やした。まったりすごすことは俺の性に合っていないらしい」
「よく分かりませんけど、休息も時には必要だと思います。事件のことなど気にせず、ゆっくりとここでの時間をお過ごしになってみてはいかがですか？」
「そういうわけにはいかない。俺の隣りの部屋で人が死んでいる状況で、捜査をやめられるわけにはいかないんです」
「そうおっしゃるとは思っていたんですけどね」
　探偵の能力とは一体何なのだろうか。
　探偵養成学校ではひたすら知識を覚えさせられた。確かに探偵には知識が必要不可欠である。知識に関して言うのであれば、俺は落ちこぼれである。級友の方が断然力を蓄えていた。
　しかし、学年が上がるに従って実地研修が始まると、俺の成績は見る見るうちに上がっていつの間にかトップに上り詰めていた。
　何も考えず、ひたすらがむしゃらに推理を行っていた。教官は実地研修を知識の応用と呼んでいた。今のボスに目を付けられたのもその頃だった。
　推理力は果たして知識の応用なのだろうか。
　知識に関しては抜群だった級友の一人も、実地訓練では芳しい成績を残さなかった。ボスはお前には探偵としての潜在能力があって他の面々にはない、と語っていた。その潜在能力は、俺の場合、忙しくしていることで発揮されていたようだ。
　果たして、このまったりとした遠野の町で、どうすれば忙しくできるのだろうか。
「あなたは根本的に間違っていますよ」
　女将さんが突然話しかけてきた。
「普段の能力が開花できないのは、あなたに宿された能力ではなく、あなた自身の問題なんだと思います」
「俺自身の問題？」
「そういうことが多いんです。私もかつて霊感を失いかけたことがありました。この旅館から座敷わらしがいなくなってしまったような気がしたんです。あの時はパニックに陥りました。どうしてだろうと試行錯誤しました。おしらさまに聞いてみても返事がありません。いろいろ考えた結果、ちょうどその頃は遠野観光のボランティア団体でいざこざがあって、いつまでも産業振興しない遠野という町に対して、ちょっと嫌気が差していた時期だったんです」
「女将さんもそう考えることがあったんですか？」

「誰でも何かが嫌になる瞬間はあるでしょう。そのときは自分と自分が今までやってきたことを見直し、再び遠野活性化へ向けて頑張ろうと誓ったとき、霊感は戻ってきました。そんなものですよ」
「はあ」
「何か、どうしても認めたくないことから逃げていませんか？」
　この言葉が決め手となった。
　狐が俺に向かって突進してきたとき、どうして俺の意識は過去の回想へぶっとんで、現実を見せなかったのだろうか。
　狐はいかにして俺の身体を越えたのだろうか。
　普段の感覚が戻ってくる。
　わざわざ呼び出し状を作成し、犯人を俺の部屋で殺害した人物は一体誰なのか。
　この平穏な町で、不穏な行動を取っていたのは一体誰なのか。
　たった今、全ての事象が頭の中で繋がり、一つの解答が提示された。
　どうやら、手帳がないと推理ができないという疑惑は間違いだったようである。ただ単に、俺が当たり前のようなことに気づいていなかっただけである。どうして今まで気づかなかったのだろうか、全てが理解出来た今となっては、そちらの方が不思議だった。
　まあでも、少しショックではある。
「女将さん、わかりました！　ありがとうございます」
　俺は女将さんに深々と挨拶すると、大急ぎで階段を二階へ上がっていった。女将さんは少しはみかみながら俺を見ていた。
　様々な懸念は杞憂だったようだ。
　とにかく、これは俺自身に関わる問題でもあった。今までそれから目を背けていたから、真実にたどり着けなかったのである。
　俺の部屋へ入る。そこでは合歓子が首を長くして待っている。
「お帰りなさい」
　彼女は優しく声を掛けてくれた。
　最初に彼女を見たときは、何なんだこの座敷わらしは、と訝しげに思った。
　出会った瞬間に結婚を迫る彼女。遠野の精霊に似合わない破天荒な性格。彼女に騒がれて眠れなかった夜。
　様々な彼女の表情が脳裏を過ぎり、走馬燈のように駆けめぐっていく。
　突如起こった殺人事件。執拗にデートを迫った合歓子。
　彼女と一緒に歩いた遠野の町。まったりとした風景に映えて曼珠沙華のように輝いていた彼女。
　思い悩む俺を心配そうに見守ってくれた着物の少女。
　この俺がちょっと、胸をときめかせてしまった少女。
　そんな合歓子に、俺は声を掛けた。
「合歓子。お前が、早渕殺しの犯人だ」

※　※　※

凍り付いた瞬間。
窓から差し込む夕日が彼女の白い肌を赤い着物と同化させていた。広く暗い畳の部屋は、一面の墨汁に一筋の赤い絵の具を垂らしたような光景だった。
合歓子は驚きのためか下着を隠すのを忘れ、脚を広げたまま呆然としていた。ばれた、という顔である。唐突に犯人だと突きつけて、全く身に覚えがないのであれば普通こんな態度には出ない。
第一、彼女はまだ中学生の少女である。小学生であるふりくらいだったらできる。
「合歓子。お前くらいの体格だったらあの窓の隙間を通り抜けることができるだろう。それが今回の密室トリックの全てであり、消極法的に考えても殺人を実行できるのはお前しかいない。よって早渕氏を殺害し、捜査を攪乱するために俺の推理手帳を盗んだのは遠野合歓子、あんただ。今回の事件はただそれだけのことだったんだ」
これが俺の推理だった。以上終了である。
今回の事件は、たったこれだけのことだったのだ。そこにたどり着くこともできず、ああだこうだ頭を悩ませていた自分が情けないくらいである。
しかし、何はともあれ真相にたどり着けたようで本当によかった。
「何を言い出すんですか」
睡眠を邪魔されたかのように、合歓子は俺を邪険な目で見つめる。そこに見られるのは怒りだった。これで合歓子の表情、喜怒哀楽が全て揃った気がする。
「俺もこのあっけなさにはびっくりだよ。しかし、それしか考えられないのだからしょうがないじゃないか」
「意味分からないです。どうして私なんですか？」
「とぼけるな。お前が犯人だろう」
俺はあえて強い口調で話す。いつもの調子を取り戻す。そうしないと、やってられない気がした。
「物も掴めない座敷わらしが犯人であるはずがないじゃないですか」
俺は、彼女からその台詞が出るのを待っていた。
そこが、今までずっと頭を悩ませていた要因だったからだ。
すかさず、彼女に真実を告げる。
「あんたは座敷わらしなんかじゃない。れっきとした、この旅館の女将である遠野柚実の娘、遠野合歓子だ」
本人が一番自覚しているはずのこと。
この事件における最大のミスディレクション。
「女将さんは、おしらさまの解説の時に『うちの子供達』と言っていたんだ。しかし、旅館内で見かけたのは高校生の少年だけだった。もう一人どこかにいるはずで、それはお前しかありえないんだよ」

「だって、だって……」
　合歓子はしどろもどろになっていた。もはや、形勢は完全に俺に有利である。
「それに、どうして座敷わらしが日中出ているんだと聞いたとき、お前は確か日曜日だから大丈夫っていうことを言ったな。あれはお前のミスだ。平日は学校に通っているごく普通の生徒だということを露呈したんだよ」
　合歓子が人間だという証拠。
　一つは河童の証言が挙げられる。まあ、河童の国自体があやふやな存在なので、証拠と呼べるかどうかはわからないけど、少なくともヒントは与えてくれた。
　河童は自らを臆面だと言う人間の少女がかつて訪れたと告げていた。臆面だというのは決して形容動詞でもなんでもなかった。少女が語った自らの代名詞である。
　そしてその少女こそ、合歓子自身だった。彼女は多賀神社で遊んでいて、向こうの世界に迷い込んでしまったのだろう。合歓子が俺にあの場所を紹介できたのも、一度向こうの世界へ行った経験があったからだ。何か、あっちの世界へ行くのはいわゆる成年式儀礼の一つなのかもしれない。
　まあ、邪推はどうでも良い。肝心の「臆面」という暗号だ。

　「臆面」→「おくめん」をアルファベット表記する。→「OKUMEN」

　あとは逆から読めばいいだけだ。初歩的なアナグラムである。
　河童が言っていたのだから、彼女が人間であることに間違いはない。まあ、あの世界自体存在がひとつの夢のような場所であるから、あまり信憑性はないけれどもな。ひょっとしたら俺の妄想の産物かもしれない。
　しかし、彼女が人間であることはもはや揺るぎない事実だった。おそらく赤い服を調達して変装していたのだろう。全ては俺や警官たちを紛らわすために。
「お前が人間であることは明らかだ。物を食べることができるし、物を掴むこともできる。人だって殺せる」
「でも！　でも！」
　合歓子は動揺していた。自分の脳を構成するネジが数本取れてしまったようだった。
　しばらくは何も考えることができずにバタバタと挙動不審な行動を続けていたが、やがて行動を起こした。
　自分の手を差し出してきた。手のひらを広げて右手をのばしきったその姿は、さながら俺を拒んでいるかのようだった。
　彼女の手に触れてみる。
　すぅっと、通り抜ける。液晶プロジェクターから映し出された光を掴むように。
　触ることはできない。
　合歓子は口元を緩ませ、少し落ち着いた様子だった。
　しかし俺は容赦しなかった。合歓子はまた恐れおののき、泣きそうな表情になった。

「悪いが、そのからくりもとっくにわかっているさ。もっとも、どうして今まで気づかなかったのか不思議でしょうがない。あまりにも人間生活との乖離がなかったんだ。食欲がいっさいなくなっただけで」
　俺は遠野屋旅館の料理を食べているわけではない。最も安い素泊まりでチェックインしている。ましてや、彼女のお勧めしていたジンギスカンラーメンや、その他遠野の名産品の数々を食べていたわけではない。飲食店に立ち寄っていたわけでもないし、この町にはコンビニがない。水すら飲んでいない。
　そう、俺はここ数日間何も口に入れていないのである。
　捜査に夢中になって一食くらい抜くことはあった。俺に食事という習慣を思い起こしてくれるのは空腹感だけだった。それがなければ、忙殺探偵の名にふさわしく、俺はずっと忙しくしているだけだった。
　忙しくて全く気づかなかった。俺がとうの昔に死んでいたなんて。
　この世に未練を残したというよりも、死んだことすらしらないで、霊となって俗世間を彷徨っていた。
　彼女を再び触ろうとする。やはり触ることはできない。ただし、そこにあったのはむしろ、彼女の肉体だった。互いが重なり合うとき、透き通っているのは彼女の身体ではなく、俺の方だったのである。
　俺は遠野に来る前から幽霊だった。物に触れることのない存在。そして、無意識のうちに人間を演じていた。
　合歓子は俺と出会う前から人間だった。物に触れられる存在。そして、意識的に座敷わらしを演じていたのである。
　その両者が重なり合った瞬間、デートをするという約束を込めたゆびきりげんまんをした時、腕を絡めて歩こうとした時、互いをそれぞれ真逆に認識するという、一つの奇跡が起きていた。いや、合歓子が俺にそう認識させることにまんまと成功したのだった。
　きっかけは横浜大黒埠頭での銃撃戦だった。あの時、俺はアンパンなどを密輸入していた不法入国者の銃撃に遭い、あっけなく死んでいたのだろう。
　あの時の光景が蘇る。銃撃戦の間、俺は一度意識を失っている。ベイブリッジから見下ろすと銃撃がクリスマスイルミネーションのように飛び交っている映像が脳裏に残っている。あの時、俺は天に召される寸前だったのだろうか。
　意識ほど不確かなものはない。イルミネーションの光景は俺の妄想が組み立てた産物かもしれない。けれども、再び意識を回復し、周囲を見渡したとき、そこに広がっていた血痕は間違いなく俺のものが過半数だった。
　それでもこの世に未練を残し、やりたいことを全くできないまま死んだため、幽霊となってこの世界に残された。天は依然俺に使命を残したままだった。死んでからも忙しく、事件の捜査などをしていたのだ。
　忙殺探偵であるこの俺が忙殺状態でなくなったとき、俺は初めて天国へ召されていくのかもしれない。

まあ、死後のことはどうでも良い。事件に関してだ。いずれにせよ、これを解き明かさないと成仏できないだろう。
俺は適宜合歓子に解説をしながら自分の推理を語っていた。合歓子は錯乱状態に陥ったまま、俺の声を反対側の耳から外へ流していたのだろう。いや、それともちゃんと俺の言うことを聞いていただろうか。
俺は文字通り新幹線の改札をすり抜け、新花巻で列車を乗り換え、この遠野の地までやってきた。自分は忙しくて殺されているのに気が付かなかった。偶然にも遠野駅の駅員は眠っていた。いや、偶然などではないかもしれない。何か大いなる存在が駅員をそうさせたのかもしれない。そこまでは推理することができない。
その晩、旅館まで歩いた。すぐに寝た。
翌朝、ロビーで女将さんと会話した。代々霊感のある家族だと女将は語っていた。彼女は俺を幽霊だと認識した上で、俺に遠野の街を紹介した。
いや、彼女は俺を『まれびと』だと思いこんだのであろう。
女将さんは俺を丁重にもてなしてくれた。古来より『まれびと』は異郷からの来訪神であり、その土地に後利益をもたらすことから、村人は大歓迎したのである。今でもその名残としての祭が全国各地に残っている。
そんな『まれびと』にお前は幽霊だというのは失礼に値すると彼女は考えたに違いない。だから、面と向かってお前は幽霊だと言わなかった。というか、別に俺も自分のことを人間だと主張していなかった。
合歓子も霊感のある遺伝子を受け継がれた人物であり、陰から俺を見ていた。かねてからの殺害計画を実行に移すときがやってきたと思ったのだろう。彼女は俺の前に座敷わらしとして出現し、おもてなししようとしたのだ。
ここでの「おもてなし」とは性的な意味合いが入ってくる。来訪神とは男性の象徴で、大地は女性の象徴である。作物の豊穣や土地の繁栄はこの両者がまぐわうことによってもたらされる。そこまで合歓子が考えていたかどうかは不明だが、人間は潜在意識にこういうのを持っていると学者は見解を出している。
有名な例を挙げると、七夕とは異界からのパワーである稲妻と生命の母である大地の接合を願い、五穀豊穣を神頼みするという祭である。断じて笹に願い事をぶらさげるだけの行事ではない。
今回の事例もそんなものではなかろうか。合歓子がどこまで意識していたかはわからない。しかし、彼女がしきりに結婚しようと言っていたのも、背景にはそんなことがあると推測できる。
河童の世界は俺の妄想の産物であった可能性が高い。
少なくとも、多賀神社それ自体に霊的な力は存在しなかった。
あの時、俺は河童の力に吸い寄せられたと勘違いして、多賀神社の壁をすり抜けていた。
トンネル効果が起こったのではないかと考えたこともあった。けれども、事実は単純明快なことだった。
しかし、事の真相はただ単に俺が幽霊であり、いかなる壁でもすり抜けることができたということである。俺は単に多賀神社の壁をすり抜け、ずっと夢を見ていただけかもしれない。俺が踊っ

たり物を食ったり飲んだりできたのも、そこが夢だったからだろう。
　しかし夢とは言え、河童たちが与えてくれたイメージだという可能性も捨てきれなかった。NEMUKOのヒントが何かを物語っている。この件に関してこれ以上の論理的な推論はもはや不可能である。遠野という霊的空間の全てを解き明かせるほど、俺は能力と資格のある探偵ではない。
　俺は一通り彼女に自分の推理を語った。合歓子は泣いていた。
　幽霊である俺は霊感のある遠野家の人々以外接触しなかった。本来ならまっさきに警察に探偵だと紹介しているはずだが、今回は岩手弁がひどかったので通訳を女将さんに依頼していた。あの時点で警察も事件の容疑者も、俺のことをさっぱり認識していなかったのだろう。どおりで標準語が伝わらないはずだった。
　俺が幽霊であってもさほど違和感を抱かなかったのは、だいたいそんな理由である。
「民俗学の話はよくわからないけど、だいたいそれで合ってます」
　合歓子は諦観の様子で答えた。
「どうしても許せなかったんです。あたしの遊んだ遠野の山里を切り崩し、えげつないテーマパークを作ろうとしていたあの男は」
　合歓子の声は本気だった。およそ中学生とは思えない迫力だった。彼女はとどのつまり人間であるが、何か霊的な力を兼ね備えた人物であることは間違いなかった。そもそも、幽霊である俺を見抜くだけの霊感がある。
「あたしは本来寡黙な人間でした。自分の感情を外に表すのが苦手でした。生まれ育ったこの遠野の町を愛し、それを駄目にしようとしていた早渕を憎んでフラストレーションを募らせるだけの陰気な女の子でした。けれども、ある日おしらさまが夢枕に現れて知らせてくれたのです。近いうちにまれびとがやってくるということを。そして早渕の計画が順調に進んでいることも」
　合歓子は感極まっていた。目から幽霊であれば決して流すことのない液体を零していた。
「どうしてこんな液体が目から出て来るんでしょう。あたしが座敷わらしじゃないって、単なる人間なんだって、ばれちゃうじゃないですか……」
　それは彼女の悲痛な叫び声だった。涙は彼女が物理的に存在することの証明。もはやどうすることもできないことだった。
　夕日は沈み、いよいよ部屋の中は暗くなった。真っ赤な和服を身にまとった少女の長い陰は部屋の暗闇と同化していった。俺にはそもそも陰など用意されていなかった。もう少し多角度から物事を判断していれば良かったなと今では後悔している。
「やがてあなたが現れました。私は蔭に隠れて、お母さんがあなたと話しているのを聞いていました。座敷わらしがどうのこうのと言っていました。この旅館にも座敷わらしが出ることを思い出しました。そして、今回の殺害計画を思いついたのです。警察にばれることよりも、まれびとであるあなたに事件がばれることを恐れた。けれども、いち早く早渕の奴を遠野から葬り去ってやろうと強く思っていたのです」
「観光政策は難しい。確かに早渕にはセンスがない。しかし、それでも奴なりに考えて導き出した、遠野生き残りのための政策だったんだろう。そこら辺をなんとか察してやれば良かっただ

ろうに。第一、殺す以外の方法はなかったのか？」
「十分わかっています。けれども、私はやり遂げる以外途が残されていなかったんです。わかりますよね？」
　なんとなくわからなくもない。けれども、俺としてはこれ以上仕事を増やして欲しくなかったというのが正直なところだった。
「あたしはまれびとであるあなたに遠野を好きになってもらうように必死でした。けれどもあたしは本来不器用な人間で、かなりハチャメチャになってしまいました。横柄な態度に見えたかもしれません。けれども、あたしはずっとあなたに嫌われないか心配でしょうがなかったのです」
「俺は犯罪者だからといってそいつを短絡的に嫌うことはしない。ある意味、探偵は犯罪者がいなければ成り立たない職業だからな。俺を文字通り忙殺したのも犯罪者だったわけだが」
「ごめんなさい。本当にごめんなさい」
「俺を殺したのはお前じゃないよ。それに、俺はまれびとでも何でもない。単なる幽霊なんだ。そのことをわかって欲しい」
「たとえあなたが単なる幽霊だったとしても、あたしにとってはまれびとなんですよ……」
　合歓子は嗚咽していた。俺は彼女を抱き寄せてやろうとした。
　俺は空を掴んだ。彼女のぬくもりはついに伝わってこなかった。この時ほど自分の無力さを悟ったことはなかった。
　目からこぼれ落ちた液体は、地球の重力加速度に従って畳へ落下し、じわりと広がっていく。すでに死んでいる俺にはできない芸当だった。泣くことができると思いこんで泣かずにいたら、いつの間にか泣けなくなってしまっていた。
　どうすればいいのだろうか。
「泣くな。その……俺は、お前が嫌いじゃないから」
　我ながら言っていることが婉曲的でわけがわからない。もっと素直に伝えてあげることができればいいのに。
「いいんです。私、犯罪者だって、わかってるんです……。あたしは人間で、お兄さんは遠い存在だって……わかっているんですよ！　こんなにも違う存在なのに、愛し合うことができるんじゃないかと考えてしまうのは、単にあたしの頭が悪いからなんですよね、きっと」
「そんなことはない」
「でも、無理でしょう？　事件が片づいたら、私の元から消えちゃうんでしょう？」
　俺は何も言い返すことが出来なかった。確かに、彼女の言うとおりだった。
　彼女はそもそも、俺と彼女が触れあうことすらできないことを分かっていた上で、結婚しようだなんて、叶わぬことを繰り返していたのだった。
　結局、俺は自分が死んでいること、彼女が犯罪者であることをそれぞれ暴いてしまっただけだった。彼女が必死に近づこうとしていたのに、逆に深い溝を作ってしまったのである。俺はどうしようもない男だった。
「すまない、俺が悪かった。俺がもう少し早く気づいていれば……」
　気づいていれば、一体何ができただろうか。答えが浮かばず、語尾はうやむやにフェードアウ

トしていった。
「それと、お兄さんの推理には間違いがあります」
　合歓子は意外な事を口にした。
　いや、推理は完璧なはずである。こうして彼女も犯行を認めているわけだし、果たして事実を露呈するのが正しかったのかどうかは今でもわからないが、少なくともこれが事実であることに間違いはなかった。
「お兄さんは事件の捜査を攪乱するために、私がお兄さんの推理手帳を盗んだと言っていましたね。あれは違いますよ。私はこうなることがわかっていましたから、無理に捜査を攪乱するようなことはしません」
　考えてみればそうだった。合歓子はわりと捜査に協力的だった。彼女は俺から愛して欲しかったのと同時に、自分の罪を裁いて欲しかったのかもしれない。
「それに、私は人間なんです。人間が、お兄さんたちのいる霊界のモノを取り出すことなんてできないんですよ。多分、どこかのお化けか何かがやったんだと思いますよ」
　どうやら、合歓子の勝ちみたいだ。
　結局、あれは謎のままか。
　しょうがない。
　実りのない人生だったが、最後に遠野を訪れ、殺人こそあったが彼女に出会うことができて良かったと思う。俺の退屈な日に花を添えてくれた。
　本当はもっと付き合ってあげれば良かった。けれども、もうすぐお別れの時がやってくるだろう。中途半端で本当に申し訳がない。
「本当にすまなかった」
「いいえ、私がわがままなだけなんです。お兄さんが謝ることはないって、どうすることもできなかったって、わかってるんです……」
　俺は彼女を強く抱きしめようとした。どうすることもできなかった。俺は彼女の前で、ただ非力な幻影を演じていた。やがて俺の身体は透明度を増していき、天へ召されると共に、彼女の前から姿を消してしまうだろう。それは死んだ者の行く末だった。自分が霊体であると認識し、納得してしまった今、残りの時間は少ないかと思われる。
　俺が彼女に最後の言葉を告げるために口を開こうとしたとき、合歓子はすかさず声を投げかけた。
「最後にあの約束通り、デートして下さい。ゆびきりしましたよね？」

最終章「遠野物語拾遺」

　翌日、俺は合歓子とともに六日町バス停から早池峰バスに乗り、遠野バスセンターまでやってきた。
　愛宕橋を渡り、愛宕神社の近くを歩いていた。この周辺にある五百羅漢を見に来たのである。確かに、あの時の狐捜査はデートと呼んでいなかった。これが初めてで最後の機会である。
　今から二〇〇年ほど前、東北が大飢饉に襲われたときのことである。事態は深刻で、遠野でも数多くの死者がでていたそうだ。大慈寺の義山和尚はその霊を鎮魂するために五〇〇体の羅漢像を作り上げた。今ではそのうち三八〇体ほどが確認できる。
　俺は苔蒸した岩の上をゆっくり歩いた。およそ東京の人々が思い浮かべるようなデートスポットではなかった。足下にあったのは雨や風に削られ、すっかり苔を身にまとった石像たちだった。それでも合歓子はいいと言った。合歓子はこの土地を愛していた。俺はそれに従うだけだった。
　今日はすべて合歓子の思うがままに従った。悔いの残らぬよう、存分に彼女のわがままを聞いてあげるつもりだった。それでも、彼女がデートコースに選んだのは、こんなあっさりした近場だったのである。俺は周囲の空気が重いだけ、彼女の想いを汲み取ろうと必死だった。
　それでも、口から出てくるのは妙に説教臭いことばかりだった。死んでいるが自分が嫌になってくる。
「自首しような」
　俺は合歓子に語りかけていた。
「保証はできません。あなたを追いかけて楽になっちゃうかもしれないから」
「おいおい、全く死ぬつもりのなかった幽霊にそんなこと言うなよ。俺の分まで生きてくれって」
　合歓子は頭の良い子である。弱音を吐きつつも、俺の真意を受け取ってくれるに違いない。
「頑張ってみます」
　彼女はそれだけ言った。あとは無言のデートだった。物理的に触れあうよりも、心が触れあうことの方がよっぽど大事なのだ。彼女はそれを理解している。だから大丈夫だ。俺は彼女を信じた。
　岩のくりぬかれた場所に賽銭箱があった。今でも上の岩が崩れ落ちてきそうな場所だった。合歓子はそこに五円玉を投じると、両手を合わせて一生懸命念じた。彼女が何を祈祷したかは幽霊である俺にもわからなかった。俺も手を合わせて目を閉じた。デートはだいたいそんな感じだった。
　河童の楽園は果たして俺の妄想だったのだろうか。これについてはなんともいえない。夢オチだったかもしれないし、実際に俺の魂はあくなきところを探求していたのかもしれない。
　座敷わらしの正体は合歓子だった。果たして、この世に不思議なことなど存在しないのだろうか。探偵とは科学的根拠のある事柄ばかり追い求める役割なのだろうか。
　いや、この世界には不思議なことがまだまだある。

俺の存在がそうだというのは短絡的発想過ぎる。
二日目の朝のことを思い出して欲しい。俺は女将さんと座敷わらしについて語っていて、合歓子はそれを蔭で聞いていた。俺はその時女将さんに昨晩の状況を語り、合歓子はそれにヒントを得て座敷わらしの変装を開始したのである。
それならば、俺が初日に目撃した赤い着物の裾は、一体何だったのだろうか。

……。
待てよ。
もしもあの河童の楽園が俺の妄想ではなく、多賀神社の奥に実在していたとしたら。
もしも合歓子の他にも座敷わらしがいるとしたなら。
もしもこの町が科学では解明されない不思議に満ちていたなら。
プペシコーラのキューカンバー味を届けてくれた峰村三吉さんは、ひょっとしたらあの狐が化けた姿だったのではなかろうか。河童の世界へ続く通り道の途中で空腹に喘いでいたあの狐である。
自分のポケットを叩いてみた。そこには、あるはずのカロリーメイトが存在しなかった。これがないということは、あの世界は実在したということである。
おそらく、狐が恩返しをしてくれたのだろう。
そして、合歓子と一緒に捜査した際、しゃべってくれることはなかったものの、あの狐も俺の透けた身体を通り抜けることにより、俺の推理にヒントを与えてくれていたのだ。峰村三吉もその狐も、全部俺がカロリーメイトを与えた狐そのものだったと考えるとしっくりくる。
そして、もう一つ判明したことがある。
俺の推理手帳を盗んでいった犯人がわかったかもしれない。
俺は空に向かって大声でそいつの名前を呼んでみた。
いつの間にか、俺には呪術的な力が備わっていた。名前を呼ぶ行為は、召還魔法を唱えたのと同義だった。
突如として風が吹いてきた。
冷たい北風ではなく、渦を巻くなま暖かい風だった。
合歓子も周囲の異変に気づいたようだった。辺りをきょろきょろとしている。
やがて、視界が真っ白に染まっていった。
「これは何だ？」
「わからないです！」
合歓子に聞くのは見当違いだが、聞かずにはいられなかった。
まさか本当に現れてくるなんて。
「お前、何か呼び寄せてないか？」
「二人だけのデートなのに、そんなことしませんよ！」
合歓子の叫びは突風に遮られた。視界はゼロに近かった。
「大丈夫か！」

　大声で叫ばざるを得ない。
「なんとか！」
　合歓子の身体がとばされてしまいそうな風だった。これは果たして、お迎えが来たのだろうか。
　やがて、上空からまばゆい光が差し込んできた。雲から太陽の光が漏れ出たようだった。
　舞い降りてきたのは、一頭の馬と雪のように白い女性だった。
「おしらさま！」
　合歓子は叫んだ。
　反応するのに数秒を要した。
　ついに幻が、目の前に現れたのである。
　煌々とした空気の中、真っ白な入道雲のように旋回し、神様は俺の前に姿を現した。
　周囲が五百羅漢であることを忘れて、俺はその神様に見入っていた。
「羽黒荘介さん」
　ガラス細工のように透き通った声が響いた。妖艶な女性の声である。
　どうして俺の名前を知っているのかという些細な疑問は、目の前の神々しい風景に気圧された。
「あなたの推理、一部始終を拝聴しました」
「光栄です」
「いかにも、私があなたの推理手帳を盗んだ犯人です。動機は……あなたにこの事件を解いて欲しくなかった、とでも言いましょうか。あなたに悪気があったのではありません。この善良な少女を悲しませたくなかったのですよ。もっとも、こうなってしまうのは仕方ないことでした。謹んで返却させていただきます」
　おしらさまは合歓子に早渕三蔵の暴走を伝えていた存在だった。おしらさまは遠野の危機を察知しつつ、自分ではどうすることもできないので、霊感のある彼女に全てを委ねたのだろう。そんなおしらさまにとって、俺は邪魔者であった。しかし当の合歓子が懐いているので、ひどいことはできない。仕方がなく、推理手帳を盗むというかわいげのある犯行に及んだのだろう。俺は既に死んだ身であり、その所有物を盗み出すのが可能だったのはおしらさまだけだった。
「些細なことではありますが、少し間違っていることがありましたので訂正させていただきますね」
　優しそうな声でとんでもないことを仰る。
「何だ？」
「いや、推理は大筋合っていますよ。本当に些細なことですの」
　隣りにいた馬が嘶いた。訓練された競走馬のように、美しい流線型のボディーラインだった。毛先の艶も見事である。これなら女性が死ぬほど大事にするのも分かる気がする。
　合歓子は唖然として、口を開けたままだった。さすがに彼女も神様の姿を見るのは初めての経験だったらしい。
「その前に聞きたいことがあります。手帳の紛失とは別に、あなたの捜査を邪魔していた物の正

体が分かりましたか？　普段のあなたであれば、もっと早くこの事件を解決できたかもしれません」
「俺自身の問題でした。俺自身が幽霊であるという事実を無意識的に察知し、気づいてパニックを起こさないよう脳のどこかが入ってくる情報に制限を掛けていたのだと思います」
「さすが名探偵ですね」
　突然意識がなくなることが頻繁にあった。顕著な例は狐がこちらへ向かって飛んできた場面である。あの時、俺の脳は自分の身体を狐が通り抜けていったという衝撃的なシーンを拒否し、仕方なく回想シーンが代わりに挿入されたのである。あれらは全て俺の脳が仕掛けていた防衛システムだったのだ。
　俺はなんだか褒められたようだったが、一応謙遜しておいた。
「いえいえ、まだまだ修行が足りません。見ての通り死んでしまいましたが」
「あなたは普段、忙殺探偵と呼ばれているそうですね」
　会話が成立しているかは謎だった。しかし、神様であればしょうがない気がする。一問ずつ答えていこう。
「まあ、そうらしいですけどね」
「忙しくしなければならないというのはあなたの自己同一性ではありませんよ。あなたが遠野に来てから調子が振るわなかったのは、決して休息を取ったからではありません。あなたが死の恐怖に立ち向かい、まれびととしての人格を得るのに、少々時間を要しただけなのです」
「死の恐怖？　まれびと？」
　何を言っているんだ、この神様は。
「あなたの推理が決定的に間違えている点を指摘します。それは、女将さんや合歓子ちゃんがあなたをまれびとだと勘違いしたのではなく、本当にあなたがまれびととしての資格を有したという点です」
　合歓子はようやく笑顔になった。
　俺はさっぱり話が読めないでいた。
　おしらさまの話は紆余曲折すぎてよくわからない。しかし、それでもなんとか聞き取れたことを整理してみると、どうやら俺が幽霊とかじゃなくて、一端の神様になってしまったということのようだった。
「その通りですよ」と馬が言う。こいつも喋れたか。
　まあ、狐も喋る時代だからしょうがない。
「多賀神社の向こうは聖域です。あなたは擬死を遂げて河童たちの世界へ行き、完全なまれびととして再生しました。死の恐怖を乗り越え、立派な神様として君臨する資格を与えられたのです。
　あなたは天に召されると言っていましたが、それはあくまでも仏教やキリスト教の価値観ですよね。この国は草木や土地、様々な所に八百万の神様が宿る国です。あなたはこれからも来訪神として諸国を行脚し、この国を平和に司る使命があるのです」
　それって結局探偵のことじゃないか。やっていることはあまり変わらないぞ。人間じゃなくな

っただけで。
「まあ、そういうことです」
　神様も案外適当である。
　いや、俺も神様なのか。随分適当な感じでも良いんだな。
　神様か。
　思ったより悪くはなさそうだ。
　雪女を彷彿とさせるおしらさまはあまりにも美しい微笑みをこちらへ向けると、俺を手招きした。
　神域という名のこちらへ来いと呼んでいるのだろう。
　もう、俺は何も恐くなかった。
　最後に母ちゃんと話したかったけれども、今となってはしょうがない。
　今度枕元に立って驚かしてあげよう。
　ふと、悲しそうな目で見つめる少女の姿を横目は捉えた。
　既に俺が人外であることをわかりながら、それでも接触を続けた霊感のある少女。
　必死に座敷わらしの真似を続け、俺の気を引こうとしていた少女。
　この土地を愛し、邪魔な者を廃するために一大決心をした少女。
　その合歓子が今、大切な人がどこか遠いところへ行ってしまうのではないかという不安に襲われ、瞳から涙をこぼしながらこちらの方を眺めていた。
「お兄さん、やっぱり行っちゃうんですか？」
　俺はふと立ち止まった。
　彼女を置いていって良いのだろうか。
　これからどこへ向かうかはわからない。しかし、彼女は家の守り神……いや、人間の少女なのである。
　彼女を連れていくわけにはいかなかった。
「おしらさま」
「わかっています。彼女は、私が預かりましょう」
　合歓子の涙が一瞬止まった。
「預かるって？」
「この国の法律からすれば、彼女は犯罪者です。けれども、彼女がこっちの世界へ来れば、彼女は遠野を救った英雄になれます」
「こっちの世界って、まさか……」
　おい、それはやめろ。
「安易に霊界へ引きずることはしません。ちゃんと私から彼女の母親に相談し、彼女と何ども話を重ねてから今後を決定するつもりです。でも、思い出してみて下さい。彼女もまた、あなたと同じように多賀神社の聖域を超え、遠野の神域へたどり着いた資格ある者なのです」
　それはそうかもしれないが……。
　合歓子は俯いていた。どうすればいいのかわからないようだった。

「合歓子。お前が決めることだ」
「あたしは今すぐにでも、お兄さんと一緒になれるのならそっちへ行きたいです。けれども、そう簡単な話じゃあないんですよね？」
　俺と一緒になるということは、死を意味する。
「俺は探偵だ。その仕事は、一つでも死を減らすことだ。だから、お前には生きながらえて欲しい。けれども、強制はしない。お前がじっくり時間をかけて決めればいい」
「そうですね」とおしらさま。「私とゆっくり話し合いをしましょう」
　そんなわけで、俺はしばしの間、彼女とお別れすることになった。
　これから彼女がどういう人生を送るのか、それとも人生を擲つのか、それは全くわからない。ともかく、俺はたまにこの地へ足を運び、彼女の様子を伺うことにしよう。
　最後に、俺は近くに転がっていた岩石に自分を重ね合わせた。合歓子はその岩をいつまでもいつまでも抱きしめていた。
「いつになるかはわかりませんが、あたしもいずれそちらへ行くと思います。そのときまで、しばらくお別れですね」
「ああ。いろいろ悪かったな。ありがとう」
　岩石にぬくもりなどなかった。苔むしたその冷たい岩を、合歓子はずっと抱きかかえながら嗚咽し、祈りを捧げていた。

　忙殺探偵、羽黒荘介。
　人間としての事件はもう終わってしまったが、これからも忙しく捜査の毎日が続くのは予想の範囲内である。
　けれども、今は遠野式のやり方に乗っ取って、ひとまずこの物語を締めておこう。

　どんとはれ。